が、生存は五名で、十三名が戦争によって、犠牲になっておられる。

城間勝弘さんの場合もお母さんと十六歳の自分を頭に弟妹六名、計八人が避難にさまよい、その中に結局四人は亡くなり四人は生残ることを得た。

我謝の座談会は、区長さんのお骨折りで、各面にわたる人選をして下さって、かつ人数も揃って多かった。時間の都合でゆっくり語っていただけなかったうらみはあったかもしれないが、宮平政子さんの場合などは、われわれが出かけて三時間ばかりかけて、再録した。

この座談会には、他では見られない、立法院議員の平良さんがご出席下さって、当時の特色に富む体験談を、相当にくわしく話して頂いた。

沖縄県民にとって、今次戦争は、あまりに惨酷なものであったがために、座談会の出席をどこの部落でも拒む人ばかりのようで、それは、思い出したくない、という気持で、区長さんは再三、奔走され、承諾を求めて、かろうじて出席して貰うのが実状のようであるが、我謝部落でもきっと区長さんは、再三ご依頼して出席して貰ったことと思ったが、しかし、ここの座談会は、区長さんのお話が皆さんによく了解して頂き、琉球政府の本記録篇の収録に協力を惜しまず話して頂いたことをお察した。お話の内容はすべてが心を刺す悲しい追憶であるし、お一人びとりのお姿を思い出しつつも、帰る時われわれの足どりは軽かった。話される苦痛、悲しみをおさえてのご協力は、取扱いを任じられているわたくしたちには、よく御察しができるからであった。

中城湾を控え知念・佐敷の半島の美しい姿も眺められ、かつまた広い沃野を持つ我謝部落、西原村、永遠に、またとこの悲しい座談会で語られたようなことのないことを心の中で祈りつつ、われわれは夜の十三号線へ向かって歩いた。

平良幸市（三十六歳）　防衛隊

わたしののはそんな深刻な場面はないですがね、当時わたしは喜舎場国民学校の教頭でしたので、妻と子供といっしょに喜舎場におったわけです。長男がかぞえで三つ、二番目が女の子でかぞえで二つ。誕生まだで、長男はむこう（疎開先）で二回目の誕生でした。

それで喜舎場におったもんですからね、あそこは、あまり疎開が思わしくなく希望者がおらんです。それで地方事務所の方がたが見えて、「君がやらんからみんなやらんのだ、どうしてもやれ」というもんだから、じゃ、やろうといって、ちょうど部隊がトラック出してくれたんですね。道具も一切合財積んでおったが、僕等が部隊のトラックで行くということになったら、今度は部落民も希望者が出て来たんです。それで自分の荷物は全部おろして、人だけ乗せて、区長さんが今も元気ですがね、この方が、「先生方の荷物は、あした馬車で運んであげるから、荷物はいいですよ」といったから、荷物は全部おろして、それが三月の二十一日ですね。それで瀬嵩（旧久志村）の学校で一晩世話になって、それから南部では艦砲が始ったです。明けたら艦砲で一日じゅう歩けないで、晩になってから歩いて、天仁屋（同村）に行って、そこで世話になる家に行ったんですが、当時、御真影は全部羽地に移してあるんですが、勅語謄本の処理はまだだったんです。またこちらには母がおるんですよ。それで、三月の二十六日が長男の誕生でしたから、それをすまして、二十七日の晩から歩き通しで喜舎場にやって来たんです。

わたしは短現（師範学校卒生は五か月の短期現役に服す）でしたから軍籍があるんですね。それで待機命令が下っていたんですよ。喜舎場到着後間もなく、集まれというもんだから、待機命令が本物になったと思って、喜舎場校の運動場に集まったら、賀谷部隊長が「日本で最初の志願防衛隊だ」とえらく褒めるんですよ。それは話が違う、僕は志願したおぼえはない津覇校の教頭が安室さんでしたからね、僕の一期先輩。安室さんのところに行って、志願となると学務課に連絡しないといかん筈だが、話がちごうから申し出て見よう。それで行ったんですよ。学務課に一応は連絡もしないといかんし、またわれわれは実際志願でもない、だから帰してくれ、といったんです。そうしたら「今更そんなことはできない」という。

仕方がないもんだから、その集まりがすんで、そこから屋宜原のですね、今のライカムの下は大きな病院の壕があります。その壕に行って隊を編成して、僕は炊事班長をいいつけられたんですね。そうして、あしたの夜の十時までに一週間分の食糧と鍋を準備して来い、との命令ですよ。これはできない、どこからそんな一週間分の食糧をさがして来るか、ところでわたしは伍長だから班長、わたしの上におるんですね、軍曹が、その軍曹が今の中城の村長なんですね。彼はわたしの教え子ですからね、彼は「それは心配ない、わしが集めて来る」、「君が集めて来るならいいんだが、しかし君、無理だよ一週間分は」、「何とかします」、「よかろう」と。そこで、あしたの午後の十時、夜の十時に記念運動場へ（中城公園の広場を戦前そういうていた）集合ということで別れたんです。別れるときに、瑞慶覧という歯医者だった方（この人は戦死したんです）、その人が僕の後を追うて来て、実は名簿を未だ出してないんだから、名簿を作るから君のうちに行こうといった。僕のうちに行って徹夜でこの人は名簿を作製した。

翌日わたしは校長に挨拶して来なければいかん、勅語謄本のこともあるしと思って、校長は仲吉という方で、県労協（沖縄県労働組合協議会）委員長の仲吉君のお父さんですがね、この人たちは喜舎場部落の後に学校の壕におられたのでそこへ行ったら、向こうは、おばあさんとおじいさん、それから奥さん、子供二人でしたね、五名。最後の疎開船に乗りおくれてもうおばあさんなんか足も腫れていた。そこで家族会議が始まって、首里市長の仲吉良光さん方へ行くか、あの方が親戚というので、はっきり憶えておりませんが、とにかく校長とおじいさんが意見が違うんですよ。どうしても市長のところへ行った方がいい、親戚の方が久志のスーナバルにおるので、あっちに行った方がいいと、なかなか意見がまとまらない。いずれにしても奥さんは乳のみ子をかかえておるし、おじいさん、おばあさんは弱いし、どこか行くまでは、わたしが食糧は持てるだけは持って上げましょうというと、そうしてくれんかといわれる。

そこで、首里に行かれることに決りましたので、首里に行かれるならば、記念運動場の下に壕が多いもんですから、じゃ、今晩はそ

こまで（記念運動場）お伴しましょうと、そこまで行って別れたんです。わたしたちが記念運動場を通った時は夜中の十二時頃でもう人はおらん、十時集合の約束でしたから。

僕は約束の集合時間におくれ、逃げたかっこうになって困ったなあと思ったんですが、翌日津覇の教頭の安室さんが鉄砲を担いで来たですな。それで「僕は遅れたんだがどうしたんですか」と訊いたら、「いや、君、こんな戦争といってはないよ」という。安室さんの話では、志願防衛隊は、北谷浜へ行ったそうですな、第一線中の第一線ですよ。「北谷浜へ行ったんだが君、弾のはめ方もわからない連中といっしょだ、それじゃあ、いくさにならん、と、わたしは腹が痛いもんだから帰って来た」、「あなたはそれでいいが、それでは、わたしはどこへ行って鉄砲取って行けばいいか」、「いや君、行く必要がない、こんないくさはないよ」、「そうですかなあ」とわたしは思い切れんわけですよ。その中にそこにはおれなくなった。退去命令。おれないからというもんだから、西原のうちに帰って行ったんです。

そうしたら、家族の者たちは一つの墓に親類の者たちと十七名いっしょにおるんですね。その墓は二つ並んで、うちの墓と、おばの墓とつづいているんですよ。このおばの墓にみんな入った。わたしのうちの墓は、おやじがまだ洗骨されていないんです。それで十七人もおるもんだから、これでは大変だと思って、伯父に相談して、さあ開けて洗骨して、入ろうといったら、叔母たちが反対するんです。父は死んで九か月でしたから、九か月で洗骨することはできないという。しかし伯父は、「君の考えによる、君がいいと思えば、いいから、開けていいから」とこういうもんだから、「じゃ、開けて見よう」といった。カラカラになっていたから、まあ洗骨は、案外無事にすましたんです。

その頃艦砲はひどいんですね。わたしは名簿は出したし、これは逃げた形になっておるし、家族の考えとしては苦しいんですね。墓のあった運王森の周辺で沖縄出身の兵隊のうち誰が一番階級が上かと訊いて見たら、幸地とかいう軍医がおるんですね。その人をさがして行って、実情話して、こういうわけだが、もうここのあなたがたの部隊にいれて貰ったらどうかな、といったら、その人は、「ちょっと待って、上司に伺いを立てて来るから」といって伺いを立てたら「石部隊の召集だろうか、石部隊の本部へ行け」という。そこは、どこかと訊いたら、首里の赤平だ、というんですよ。その時、途中の弁ケ岳は爆撃がひどいんですね、到底通れる状態ではないんです。あっち行く前に死んでしまうから、わたしはあきらめたんです。それは、死ぬのはつまらないからと思ったんです。

それから、天一号作戦ですか、天長節の日は。その時は盛り返すという話もあるんですね、また西原国民学校の付近まで、敵の戦車が来ておるという話もありましたがね。その時に沖縄は有利に展開するのだという話もありましたが、やって見たら天長節過ぎても、状態は一向によくならん。このままではここはおれなくなるから、南の方へ行こうといったら、伯父は反対です。「まあ、ここは墓だからね、自分の死に場所だから行かん、しかし小さい子供たちもいるから、みんな死ぬわけにはいかんから君は子供たちをつれて、南の方へ下れ」ということになったんです。母もいっしょでしたから

ね、母は僕といっしょに行ったんですが、途中で爆弾の破片にあたって怪我したんです。重傷ではなかったが足をやられたので、わたしが背負って行った。島尻行ったら壕はない。移動するたびごとにしょっちゅう母を背負っていたんです。

与座・仲座から運玉の付近を見ていると毎日爆撃がひどい。それで伯父をつれて来ないといかんが、何とかできんかと思って、与座・仲座の壕の上にのぼって見るんだが、まあ、毎日ひどくやるんですね。これは困ったもんだ、そう思っているうちに五月の十九日、具志頭の学校に、十七歳以上の男たちはみな集められた。そこへ行ったら、番号をかけさせて、三つに切って、三個小隊につくった。わたしは伍長でしたから第一小隊長、第二小隊は親泊という人でした。第三小隊長の名前は忘れたな。わたしの小隊の中に親子一しょの方が入っているんです。このおやじは中支に行って、帰って来た人ですがね、マラリア持っておるんですよ。それが小隊長の僕に申し出たんですよ。親子ですからね、わたしは中支へ行ってできるだけやって来たんだから、わたしだけは許してくれというもんだから、それはそうだと、それでわたしは兵隊にいうたら、「そんな馬鹿なことがあるか」とさんざん油しぼられた。それは、「日本男子が戦争をのがれようとすることがあるか」というんですよ。それで叱られて、口では言わないが、素振りで、「あなたは逃げなさい」と示したんで、親爺は逃げた。

それから誘導兵がついて、誘導して行くんですね、行ったところは、八重洲岳です。大きな壕がありますよ、そこの隊長は軍医でした。待てといわれて、壕の入口に坐わらされて待った。

隊長が出て来ていうには「君等がここに来るとは知らなかった、市町村長に人を集めよとはいうたが、君等が来ることは、わしは知らん」、「じゃ、解散しましょう」とわたしがいったら「いや、それはいかん、待て」というんです。それでしばらく待っておったら、また誘導兵が来た。連れて行かれたところは、玻名城というところ。そこにですね、大きな壕があるんですよ、二階、三階あるんだな。一番下の壕に軍の食糧を入れてある、それは水浸しになっておるんだな。その水を汲み出すのがわれわれの任務。一晩じゅうそこで汲み出しをやって、そこで、軍服をわたされて、着換えたんですよ。僕は国民服でしたから、自分だけはそのまま、換えませんでしたがね。

その作業がすんだら、そこからまた今度は外間の前の壕に移された。そこに行ったら、外間の前の橋は、ちょうど首里が陥ちる直前でしたから、艦砲で毎日のほど壊される。壊れたら修理に行く。その修理に二回ほど行かされたが、幸いに僕等が行っている時にはあまり艦砲が落ちない。

つぎは弾運びとお握り運びですよ。その壕から南風原の壕に行って、弾を取ったり、お握りを取ったりして、虎頭山に行くんです。わたしは小隊長ですからね、何も持たないでいいんです。その南風原の壕から運ぶんですが、二回目運ぶ時には道具がない。それで少年たちはズボンを脱がしてです、お握りをそのズボンに詰め込んだ。そうして行く時は誘導兵をつけてくれた。虎頭山の壕の前に行ったら、うず高くこれを積むんです。そうすると兵隊が、有難う、危い危い、早く帰れ、帰れ、いうんですね。そこで置いたらみ

んな帰る。帰る時は誘導兵はつかん。めいめいで帰る。ところが三回目でしたか、わたしは少年たちのように歩けないんですね、どうしたのか、自分でもわからない、少年たちのように歩けんという筈はないんだが、おかしいなと思いながらやっていると、崎山（首里）ですかな、そこら辺に来ている時には首里城が盛んに燃えている頃でしたがね。

そこを兵隊の負傷兵が通るんですが、それは見ておれんでしたね、片一方の足の無い人が、戦争に対する恨みつらみ、「こんな馬鹿な戦争をして……」といいながら通って行くんですね。あの時、弾は酷かったんですがね、わたしは石垣が残ったところに身を寄せていたんです。今のハブカクジャー（蛇の顎）というところは酷かったです、艦砲が。

ところでわたしはゆっくりしか歩けんもんだからゆっくり歩いていると、飛行機が低空するんです。まさか人間一人ぐらいに低空して撃つはずはない、と思ってゆっくりゆっくり歩く。ところがやるんですね、それは僕一人を目がけてやったのか、どうかは知らないが、低空して来てやるんですよ。これは歩かれない、すぐ甘蔗畑の中へ入って、昼中はそこを動かなかった、それで、部隊では、わたしが戦死したと思ったようですね。晩帰って看護兵に診せたら、脚気ですね、翌日は顔が腫れておる。どうりで歩けなかったなとはじめてわかったですがな。あの時は、雨が長くつづいたもんだから、壕の中はじめじめして大変ですよ。それで僕は脚気ということがわかったもんだから今度は第一小隊長ははずされて、病人だけ僕のところに集まって病人隊長にされたんですね。翌翌日かな、僕の小隊が行く番になっておるのを、僕が行けなくなったもんだから親泊小隊が行った。これは兼城の十字路で全滅。

それで病人隊長にされたもんですからね、三日後だったかな、今度は移動するんですね、僕等の部隊みんな南の方へさがるということになって、「君等は充分に歩けない、夜は大いそぎで行くのだから、あしたの昼来い」という。真昼、一人歩いてもやるんですからね（飛行機の機銃射撃）。「わたしは真昼ならそんな沢山の病人をつれては行かん、歩けるか、歩けないかわからんが、今いっしょについて行く」といって何回も折衝し、後には、「まあ、いいだろう、ついて来い」ということになって集まった、集まったところに落ちたんです、艦砲か何かしらんが。だいぶ死人も出たんですがね、ちょうどわたしの部下みたようなかっこうになったものが一人やられたが、それは空家に運ばれて行ったんですね。そこで、さかんにわめいているもんだから、ちょっと行ってみようとしたら、兵隊に叱りとばされて、「人間一人くらい何んだ……」といって、行かさないんですよ。

それから自分の隊員だけつれて真壁まで行ったら、壕はない。そうするうちに大人はみんな逃げて、少年たちばかり残っておるんですよ。

そうして今その場所をさがせといわれてもさがせんですが、大きな壕があって、その壕にはいった。隣にもう一つ反対側に向いた壕があるんですよ。二つの壕を掘るために中間は、盛り上っておる。六月の十七日ですね、ちょうど親父の命日でしたから、はっきり覚えていますが、あまり暑いもんだから、わたしは出口へ来て

見た。そうしたらアメリカ兵がカービン銃をさげて歩くんだ。困ったなあ、と思っておるところへ、隣の壕から伝令が来たんですよ。「早く兵をこの壕へつれて来い」と、しかし敵は弾を撃つだろう、見えるんですからね。それで全員いっしょに出たら困るからと思って二人ずつ出したんです。出るたびごとに撃つ。あっちへ行くには、盛り上っているところを通らなければいけないんですよ。でも、われわれは威嚇射撃してさえ、それだけの距離なら当らなかったから、大丈夫だろうと思ったんですが、つぎつぎおくりだして、最後に残った二人がどうしても出ないというんですよ。それはいかんからといって、いっしょに出ようと僕と三名いっしょに出たんですね。するとやっぱり撃つんですよ、二人ともやられたんです。一人は肩のうしろから前へ貫通、股もやはり貫通。

隣の壕に行ったら僕はさんざん油をしぼられた。その壕の奥には負傷した将校がいるんですよ。この連中が「真昼兵を出す馬鹿がおるか」というんです。「わたしは早く兵をつれてこいと伝令を受けて早く来ました」、「馬鹿野郎、早くといっても、夜になったら早くという意味だ」、「そこまでわたしは気がつきませんでした」といったら、それでまた叱りとばされて、今度は、「煙草持っているか」というんだね。こっちも煙草は一週間以上も吸っていない、持っていないというと、これもまた叱られるしね。

そうするうちに、具志頭出身の真志取さんが来て、「ナマド、ヒンギラリーシガ、ウンジョウ、ワンネー、ドウヌ、壕カメーテ、チョクト、ナマ、ヒンギャビラ」（今が逃られますよ貴方、わたしは自分の壕を捜して来ましたから、さあ、今逃げましょうよ）。

この方は最初いっしょでしたが、途中で逃げたんです。どうしてわたしがこっちにいるのがわかったか、僕をさがして来て、今逃げられますから、さあ逃げましょう、という。ところが先の壕を出る時、やられた少年を抱いていたんです、わたしは。血だらけですよ、この少年を放って行くわけにいかんでしょう、といってやったら、このつぎには数名の青年たちが来た。「君等はどこの者か」と聞いたら北谷だという。「この大渡の浜を越えて行けば与那原を過ぎるまでが危険で、それから後は無難だ」というんです。「だから大渡の浜に行って国頭に逃げましょう」というわけです。「それは無理だ」とそうするうちに中に入っている将校が、その青年たちが来ていることがわかったもんですから、僕に命令が下ったんです。「その青年から四、五名、屈強の者を選べ」というんですよね。全部でも四、五名おるか、おらんかぐらいでしたからね、自分たちが、おんぶされて逃げる考えですよ。もうそこもおれなくなっているんですからね。それで僕は、「ン、トウナー、イッター、デージナトウーサ、イッターヒンギトウーカンネー、ヂャーヘー、イッター、ヘークナーヒンギレー、ヒンギレー」（もう、お前たちは大変なことになっておるぞ、お前たち逃げていなくては、困る、お前たち、早く逃げろ、逃げろ）。「アンセー、ヒンギレー、ウンジョウーチャースが」（それでは逃げたらあなたはどうしますか）。「いや、僕は仕方がない、大丈夫だからにげなさい。見ておってもこの将校たちは手榴弾など投げるはずはないから早く逃げなさい」と方言で言うた。それからすぐ逃げた。

そから間もなく、待避命令ですよ。その少年は、もう一人の少年

と二人でかつぐようにしてつれて行ったら、大きな壕があってね、壕のところに行ったら入れんですね、壕には。ここは兵隊だけが入っていた。入口でみんな検査をする。どこを怪我しているかと検査して、怪我してないものは入れんですよ。一人は怪我しているので入れてくれたが、僕と四人の少年は、どうしても入れてくれない。敵の迫撃砲を食うんですよ。仕方がないから土手のところにただ匐うておるんですが、まあ弾は、来るんです。ところで弾は滅多に当らんですね。そのうちに、壕の中に入った少年が、僕の名前を呼ぶんですよ。あれはたしかに死ぬ間際であった。「何か言いたいのだろうから会わしてくれ」と頼んだが、「きくのはいくらでも中におる、強いて君がきく必要はない」とどうしても入れてくれなかったんですよ。

残りの少年たちは不安におののいている。そこへ北海道出身といっていましたがね、清水という軍曹が来て、「君等あの少年たちは危いからこの反対がわに、もう一つ壕があるから、そこへつれて行かんか」という。「それでは、そうさせてくれ」と、ところがその壕の五十メートルさきは敵だというんですよ。それで、「絶対に音をたてて行くな、そのためには少年たちはいろんなものを持っておるから、それを捨てさせなさい」というんです。少年たちはハンゴーとかいろいろ持っていましたからね。それで子供たちはそういって、音たてたら大変だから、音たてないように君等の持っているものを全部捨てなさいといった。捨てさせて、匐って、そっちから、その壕に行ったですね。夜だから、壕の中には何名人がいるかわからない。

そうしたら翌日は一日中小銃の弾が来るんです。幸い、壕の前は石垣みたように石がつまれてある。小銃だから中には飛んで来ない。夜になったか、前の壕から、われわれが生きているかといって来ていたですよ。しかし小銃だけだらか、全部生きておる。晩になったら今度は僕に命令が来た。「伊敷の部落に今晩みんなで、（兵隊は多かったが）切り込みする、前の壕に手榴弾があるから、取って来なさい、しかし時間がかかる筈だからそのつもりで行きなさい」、「行くなら僕一人では行かない、部下をつけてくれ」といったら、その部下が二人来たが、訊いて見たら、名護の青年と北谷の青年でした、もう顔もわからない。しかも沖縄で初めて召集された初年兵ですよ。壕には古参の他府県兵も沢山おるが、それはやらない。それから行ったら、最初は食糧を取って来いとのことだったが、それを取って来たら、また命令したもんだから、僕は、僕の部下からはつれて行かん、兵をつけなさい、といったら兵をつけてくれた。前の壕に行ったら、そこでは自決するのもおるんですよ。ところがまた、「今自決する馬鹿があるか」と盛んに言っているものもおるし、結局そこで二時間余り待たされたが、負傷兵にまで渡す手榴弾はない、とことわられて帰って報告した。

それで清水軍曹が手帳に名前を書くんです。最期だから手帳に名前を書いて、いよいよ切り込みだが、手榴弾はない、仕方ないから歩けるものは、石を持ってでも何らかの方法で切り込め、歩けないものは仕方がないからここで自決せよ、ということになった。

当時僕の部下は四名になっていた。この連中は方言で「デーサイ、ヒンギラ」というんですよ。それで、逃げるなら逃げていいんだが、伊敷部落・国吉・真栄平すべて米軍が入っているという情報

でしたので、どこへ逃げても囲まれておるんだが、逃げられるだろうかと思った。少年たちは泣かんばかりですよ。まあ、生きられるだけ生きようと腹をきめて、少年たちに、にげるとすぐ、後からやられるからね、中には手榴弾を持っているのもいた。それで僕は水汲みにというて出るから、君たちは、一本松、目じるしの松があったんですよ、そこへ行って待ちなさいと方言でいった。それで僕は、死水を汲みに出るから、希望者はついて来い、とそれだけいうて出た。出たら排水か何かつくってあるようであったが、どぶ水だったでしょうね、ひと口それを飲んだなあ。それから目当の松のところで待っていたら、二人は来たんだが、後の二人はどうしても来ない。それから一人に、君行って見てこいと行かしたんだが、さがすことができなかったのかどうしたのか、そこらのことはわからなかったが、「おりませんでした」と戻って来た。仕様がない、四名で行こうといって、四名で歩いて、そうしたら、あけ方の月でしたな、真壁の国民学校の隣りを通って、鉄砲の弾など何にもないもんだから、ここまで来るともう大丈夫だと、真壁の部落の前に少し原っぱがあるですね、つぎの山に入る前に。そこへ入って、もうここまで来れば大丈夫だと大声で話をした。ところがすぐ弾が来たですよ。それ大変だといって、さあ、大変なことになった、アメリカーが近くに居るんだから、絶対、歩くことはできん。匐腹前進するんだよ、と僕は脚気だが怪我はないから匐腹前進ができるが、ね、匐腹前進の意味は、少年たちもわかっておるんだが、少年たちは、二人共どっちかやられているんだから、匐腹前進できない、前進しようとすると、尻が上ったりする。そうすると撃つ。それで、「君等は動くな」といって、見たら甘蔗畑があるんですな。甘蔗畑も同じことであったはずだが、あそこまではどうにか行かねばいかん。「待っておれよ君等は」といったんだが、僕が動くと少年たちも動くんですよ、また撃って来る。「これは甘蔗畑まで行けない」と思って、何とも言わないで、僕は自分だけ、どこか低いところがないかなと思って見たら、ちょうど近くに田圃があった。そこに下りて、もう大丈夫だなと思った。さて少年たちはどうしよう、もう、あけ方になっている。そうして後ろを振り向いて見たら、もうアメリカ兵が三名来ておる、鉄砲持って。ちょうどまた偶然といえば偶然だが、捕虜になる要領という宣伝ビラがあるんだな、そこに。裸かになるようになどと書いて。それで「裸になれ」というもんだから、仕様がない、裸になった。ところが六月ではあっても寒いですね、朝の夜明けだから。冷えるもんだから、英語の単語ばかり並べて、手真似、足真似で、寒いから着物を着けさせてくれ、と少し歩いて行ってから言った。そうしたら「いい」という。いいというが、廻れ右して後に戻ったら、後ろから撃つかもしれないと思って、「いっしょに行こう」といったら、素直だな、いっしょに行ってくれた。ところが行って見たら、時計もない、財布もない、実に早業だな、と思った。振り向いて見ても少年たちはおらん。それから、ここで服をつけた。

それから二世が来て、何んやかんやいうがもう、僕は、ろくに返事をしない。しばらく歩いていたら、少年たちをみた。少年たちは、普通の民間人の方々といっしょになっていた。

わたしはそのままつれて行かれたら、ちょうど兵隊の朝飯時でし

た。初めは、土手みたようなところを背にして坐れというんですな。ヒゲの生えた背の低い、初めてアメリカ人を真正面から見るんだが、恐い。銃を構えてですね、わたしの前に。それで、「殺すか」といったら、「殺しはしない」という。殺しはしないといわれても気が落ちつかない。それから今度は「立て」というから立った。小高いところだったが、「そこへ歩け」といったから歩いて行った。「はははあ、こいつらは、誰にも支障がないように僕を殺すんだな」と思って、またも「殺すのか」と訊いた。「殺さない」という。また、「下りよ」というから下りた。

そうして人間の心理というものは、自分でも不思議に思ったんですがね、この野郎煙草をスパスパ吸うておる。こっちは一週間以上も吸うてないからこらえられないんだ。「煙草くれ」といったら、自分が火をつけてから投げるんだな、人間の心理が面白いと思うのは、投げられたもんだから、僕はそれをとって投げ捨てた。そうしたら今度は、丁寧に渡して火をつけてくれたんですね。

それでも気が落ちつかん。一、二回吸ったらこれも吸う気にならん。吸えない。それからまた、「殺すか」「殺しはしない」の問答。

それからしばらくしたら、今度は、あの時に見た印象は、戦車みたようなものが来たんです。それで、これに乗れというんだ。われわれがきいていたデマでは、最初捕虜になったものは、戦車に乗せて行くんだといっていたんですよ。それで「ウウン、これだな」と思った。ところが今から考えて見ると、病人を運ぶ車なんだな。乗れといって、上に乗せるんです。中には入れんですよ。それで、そこに乗ったら完全に落付いたな、「殺すなら、殺せ、どうせここまで来たら殺すだろう」と、自分ひとり、いろんなことを口ずさんだ、そうしたらみんな目をまるくして見ておる、「うん、これは殺さんな」と思って、しばらくすると「そこへ下りよ」といって、中に入れられた。連れて行ったところは、真栄里。行ったらそこには沢山の捕虜がいて、沖縄の有名人も大勢おる。

そうしたら中隊長らしい者だったがな、中尉だったが、僕へ、最初に言うた言葉が「今度の戦争はひどいですね」といった。僕は、このアメリカ将校を、全然日本語を知らないと思っていたんだが、日本語がとても上手だった。しかし僕は返事をしない。すると「あなたはどこですか」「沖縄です」「沖縄の人は殺さんでしょう、家族はどうしておるか」「国頭にやってある」「命はとらんでしょう」。そうするうちに、隣りで、頻死の状態のおばあさんに、水を飲まそうとするが絶対飲まない。アメリカ兵としては飲ましたい。それでその中尉が言うには、「われわれがやったら毒だと思って飲まないが、君から飲ましてくれんか」「そうか」といって、飲まそうとしたが、頻死の状態で飲まなかったですね。そうしてとうとう死んだんです、それで、そのおばあさんを担架にのせて、その中尉と二人で別にうつしたのです。

それから壕掘ったり、死人を片づけたりする働けそうなものと、そうでないものとを、分けた。僕はその働けそうでない部類に入れられて、移動したんです。糸満、今のロータリーの所に来たら、高いところから見下して、兵隊らしいものをつまみあげる。僕は国民服です。それに首里市長だった兼島先生、わたしの中学時代の先

生だがね、先生のカバンをわたしが持っていたので、すぐこれは兵隊だといってつまみ上げられてしまった。しかも訊問を受ける前に、今の琉石KKの新垣正栄さんが飛んで来て、「いや、いや、これは学校の先生、兵隊じゃない」と説明してくれたために、そこはすぐ通って、伊良波に収容されたんです。

そこから野嵩につれて行かれた。野嵩では、男だけ一つのテントに入れられたんです。そこでは、二高女の校長だった稲福先生がおられた。この人が不眠症にかかっていて、煙草好きでしたね。そこでは、山城篤男先生が教育の隊長、稲福先生が教育の長を命ぜられていた。わたしは稲福先生に、「まあ、お互い教育者だが君仕様がない、君はCPになりなさい」と言われて、CPになった。CPといっても野嵩収容所を一日に二回巡って来るだけですよ。中城の人が多かった。僕はその方々から煙草を貰って来て、稲福先生に上げた。稲福先生は不眠症で、わたしは夜中起されて、戦前の教育界の裏話なんか沢山聞かされたんですがね。

そこから今度は古知屋に移された。疎開させた妻子は生きているか死んでいるか、さっぱりわからんもんですからね、逃げて行って見た。途中で、妻子たちの事情を知った人に逢って、一人の娘は死んだ、弟の子供も死んだ、という情報を得て、残りは、天仁屋(てにや)から、汀間(テーマ)に下りて来ておる。そこへ行ってさがしなさいといわれた。妻と長男と弟の妻と三名汀間におったんです。一人の伯父もおったんですが、そこで伯父は間もなくマラリアで死んだんです。

そこでは、栄養不良で一日に十三名くらい死んだそうですね。そこへは八月に行って、一月までいました。そのころ何にもする気がしないでいた。食事はお粥と配給の鰯の罐詰でくらしていた。配給は実に少なかったんです。何か役所関係につとめると特配があるんですな。でもそのままにしていたら当鉛由金さんに見つかってしまって、「お前ここに来ているのに、何もしないということがあるか」といわれ、三原の学校につとめることになった。その後瀬嵩女子部(といっても浜辺での学校)、瀬嵩市役所にもつとめました。

久志におったら、あまりひどいので、それが中部まで聞こえたんでしょうね。その時、ちょうど兼島先生が、コザ高校の校長で教育課長。中城村民が自村へ移動許可になった時に、僕をコザ高校の教員にするからという名目で、僕は呼び出されたんです。中城の移動者といっしょになって、中城村の安谷屋に行ったんです。安谷屋は、わたしが喜舎場国民学校の教頭していた時の、担任部落でした。それでいい所へ来たといって落付いておったら、二世が来て、「君は嘘を言うた、君はコザ高校の教師になるというて出て来たのに」といって引き戻されて、越来につれて行かれ、そこからコザ高校へかよい、二か月くらいつとめた頃、西原村が、移動許可になって、わたしはコザ市長から我謝区の区長を命じられた。

母は、南部で別れたもんですから、どこで死んだかわからない。弟の嫁がついておるんですが、腹をこわしている上に足も駄目で、歩けんもんだから、自分たちだけ逃げたんですね。長女も、弾にやられたそうです。

墓にいた伯父たちは、南にさがって全滅。一人のおばさんだけは、ついに行かないで、こっちで死んだそうですが、残りは、島尻へ行って全滅です。

伯父夫婦、叔母夫婦、それに叔母、それから別の家族もいっしょです。それは、米須の砂糖小屋でやられたようです。

伯父は、ここ（我謝）で死ぬんだといって頑張っておったが、やっぱりおれなかったんでしょう、南へさがった。

僕はすぐ来るつもりだったんですから、オーバーを置いてあったんですよ。それで伯父は僕のオーバーを持って、僕を捜し廻って歩いていたそうですよ。

三男（三番目の弟）は、沖縄現地での二回目の現役兵でしたがね、これがどこへ行ったかわからん（戦死場所不明）。

次男は、海軍に召集されていたんです。これは帰って来ましたよ。

直接見てひどかったこと　見たことでは、今の宇東風平ですね、あの通りの前と、よく覚えていないが、その通りのもっと先の方だと思う、道ばたに大勢人が死んでいた。今の郵便局の前かな、部落前の大通りも大分死んでいましたよ。それがただ坐っているんだと思ったら、いっしょの連中が、「いや、あれは、爆風で即死だ」といったが、ちょっと見たら生きてただ坐っているように思ったが、やっぱり死んでおるんだな、という気がしましたがね。

今の東風平の学校ですね、東風平の学校越えて橋がありますね、この橋を僕等がちょっと越したときにそこで弾を一つ浴びせられた。もうちょっとゆっくり歩いておったら、やられておったでしょうね。

それから、真壁の周囲も死人が沢山いたようでした。畑の中でしたからね、そこはあまり死人を見なかったんです。

註、平良さんは、わたしはそんな深刻な場面はないと前置きして話し出されたが、夫人、長男、弟一人の三人だけが残って、母上、二人のお嬢さん、弟さん方をはじめ、十一名の三親等以内の近親を失っていられる。お話は、淡たんと、ドライに語っていられるが、弾降る中に母上とお嬢さんを置いて召集され、別れて行かれた時の気持ちなどは、わざわざ避けていられるようであった。お話を文字に移すに当って、心につきまとう重いものに捕われた。

宮平　かまど（三十歳）

最初はですね、お母さんと子供が三人、いっしょに桃原の裏の壕に入っていました。そうしたら、隣りの壕に直撃が落ちて、その壕にいた十七人が、全滅してですね、そうしてわたしたちの壕も、わたしがいたところは潰れて、わたしたちの家族四名は寝ていましたが、埋められてしまいました。わたしたちが入っていた壕は、口が両方ありまして、他の入口にはお爺さんと孫が二人入っていましたが、そこは壊れなくて無事でありました。

それでおじいさんと二人の孫と三名は、鍬をもって土をいそいで取りのけて、土の中からわたしたちを出してくれました。長女は眼の上などあちこちに、鍬で疵を受けましたが、しかしおじいさんが、鍬でゆっくり掘って下さったので助かった。もしあわてて鍬を強く扱ったら、助かってなかったかもしれません。

わたしは、足をさわった時には、わかったけれども土の中から出され水をかけられても わからなくなっていたんです。明るくなって、じきにおばさんが、「さあ、砂糖を食べなさい」といって、わたしの口に砂糖を押し込むので、何でわたしが起きて直きに口に砂糖を押し込むのだろうと思って、自分が埋められていたということは全然わからなかったんですね。

隣りの壕が直撃受けて、中にいた十七人の全部が全滅する時ですね、わたしのお母さんは、あまり激しいもんですから、臆病の六歳の次女を抱くようにして、助けて下さいと、神様に祈っていたんですが、隣りの直撃のために、自分たちも埋められてしまったんです。もし二ところやられていたら、もう駄目だったと思いますよ。

壕にいる時は、子供はお母さんに預けて、わたしは芋を掘ったり、甘蔗を切って来たりして昼の食糧にしておりました。お母さんは、土に埋められたので、腰が弱くなってしまいまして、島尻へ行く時も困っていました。

それで男たちのいる方に移動していましたが、その時に、いっしょに避難してやろうと、兵隊さんが言ったから、糸満の方へ夜通しに行ったんです。その時、糸満は、壕がないし、また夜通しに帰って来ましたよ。そうして二、三日は、こっちにいたけれど、棚原で戦ってからですね、友軍の兵隊さんが「あしたはここは第一線になるから、早く出なさい」といって、あちこちの壕をさがして歩きましたよ。

それで大里村の大城へ行きましたが、六つになるのはとても臆病な子でしたから、「おばあさん、おばあさん、恐いから、おんぶして、おんぶして」といって、歩きませんですよ。大城へ行く時は、もう何時頃になっていましたかね、夕方になっていましたが、飛行機二機が旋回して来て、避難民を目がけて、機銃射撃しましたので、次女はお母さんがおんぶしていますから、「みんなしっかりくっついてよ」といって避難した。この飛行機が行ってしまったら歩いて、夜通し歩いて大城に行ったんですよ。「あっちは特攻隊が避難しているから安心よ」といって歩きました。

そうして、あっち行ったから、特攻隊の兵隊さんが「どこから来たんですか」ときいたので、「西原からです、主人は兵隊に行っているから、壕をさがして下さい、兵隊さん」といったら、「おばさんたちは死に物狂いで歩いているから、おばさんたちが歩くところは、どこでも無事ですよ」といって、その兵隊さんたちが壕をさがしてくれたんです。

そうしてお母さんの兄弟の叔父さんたちもみんないっしょになってですね、ところが、そこで四、五日いましたら、激しくなって、立ち退きになったんです。

おじさんの家族は、おばあさんが二人、叔父さん夫婦、子供二人の六人でした。叔母さんの家族は何人いたかわかりませんね、それで大勢でしたから、大城では二つの壕にわかれて ですね、おりましたよ。

そうして大城から前の方へ行って、前川行ったらまあ、弾は弾で

激しくて、雨も一日中降ります。けれどね、弾はとても激しいんですが、兵隊さんが、「早く出なさい、早く出なさい、出ないと殺すよ、手榴弾で殺すよ」といって、壕を追い出していました。

前川まで来たらですね、普天間からも、那覇からも、海からも艦砲射撃、どんどん、どんどんするでしょう。そうして、もう食うものは何にもないですからね、子供三名、食べる物はないから「鰹節をしゃぶっておけ、弾は激しくなるし」といって鰹節を削って、しゃぶらして、お母さんと二人は、何にも食べるものは無いでしょう。そうして、弾もとても激しいけれど、雨も雨、降りつづいて、前川にもいられなくなりました。

前川にいたところは、下には兵隊さんたちが大勢いて、わたしたちは、上の方におりました。そこには、遺骨が沢山あってその上におりました。それで、遺骨にお祈りをしました。「わたしたちは西原村のものでありますが、戦争に追われて、ここにいますのでお助け下さい、おゆるし下さい」といってお祈りしてですね、子供たちにも、骨の上に、「寝ていなさい」といって寝かして、それでまた、ひもじいと泣いたら、鰹節をしゃぶらして、すかしておりました。遺骨は、昔のもので、そこは墓ではありません。

註、壕というのは、沖縄の中南部にしばしば見る崖の、柔かい部分の層が長年月の雨水に浸蝕されて、堅い岩石は残って空洞をつくっているところと推察される。遺骨というのは、背時、墓の代りにそこに、死人をおさめたのであろう。

前川に行ったら弾は弾で激しかったんですが、雨は雨で一日中降りつづきましたから、それにいい壕も見つかりませんので、叔父さんやおばさんの家族とは別べつになりました。わたしたちの壕は小さくて、家族五人だけしかこっちにいられませんでした。

そうしていたら、叔父さんたちが、「こっちは大変だそうだよ、与座・仲座へ行こう」といって来たので、与座・仲座に行きました。前川では、叔父さんたちも、近いところにいたんでしょうね。

前川へ来るまでは、いつも夜歩きましたが、与座・仲座へ行く時は、昼、雨の中だが、「地雷を埋めてあるので、注意しなさいよ」といわれて歩いた。

与座・仲座行ったら、もう食べるものはない。ところが兵隊さんは、女といっしょに住んでおる。それで、お母さんが「おい、おい、子供たちはずっとひもじい思いをしているんだ。こっちにごはんをよこしなさい」といって、兵隊からお握りを一つ貰ってですね、六つなる子と、息子は九歳になるから、この二人に少しずつ分けて上げて、「我慢してね」といってやりました。

そうしたら、また、照屋さんといって、兵隊といっしょにいらっしゃったんです。そのお医者さんが、また、「あしたここは激しくなるから避難してよ」とおっしゃったから、ね、少しこの与座・仲座で休んで、「さあ、早く行こう」といって、喜屋武・福地まで行って、あっちで、しばらくは激しくなかったので、ゆっくりできましたよ。

また二、三日したら、あっちも激しくなってですね、弾はとても激しくなって、水汲みに行く時にも、井戸ばたや、あっちこっちに人が倒れて死んでいました。それを見て、神様にお祈りしました。

「死ぬ時は家族全部がいっしょに死んで、生きるなら、みんな助けて下さい」と。水汲みに行く時には、こんなことをいつもお祈りしました。

わたしたちは、喜屋武・福地へ行ってじきは、人の家にいました。その時は、水も家にあって、汲みに行かなくてもよかったんですが、三日ばかりしたら、それは、ロケット砲といって、あっちにもこっちにも、飛んで行く、迫撃砲ですね。これが、隣りの石垣の上に落ちたから、こんなにあっちっきあたり、こっちにつき当り、曲りくねって、これが叔母さん、叔父さんの奥さんの目の上に当って、何んとも言わないで倒れて、おっぱい飲んでいる子を抱いていたが、この子は弾は当ってはいなかったが駄目になったんです。生れてまだ三か月でした。叔母さんがやられましたので、乳を飲んでいる子ですからね、仕方ないんですよ、あの時は。

そうしたから「ごはんを炊いて、早く壕さがしてここから出ないと大変よ」といって叔父さんがですね、壕もないでしょう、あっちは。それで畑の畦に擬装してですね、木の葉っぱをとって来てですね、壕はないからそんなにして住んでですよ、もうどうにもなりませんからね。

福地部落の人の家から逃げる時ですね、木の幹が上の方で、二つに岐れたところに、死んだ人が尻から引っかかっていたんですね。それを子供たちが珍らしがって、「ねぇお母さん、こんなにしておる」というんです。それで、わたしは、厭やで見たくなかったんですから、「そんなのは見るな、今度の戦さは、こんなことくらい何でもない、早く歩け、早く、早く」といいました。喜屋武・福地では、あまりあちこちに人が死んでおるので恐くてですね。軍艦から弾を撃つ音ですがね、大鼓をたたくように、パンパン、パンパン音がして、弾は人の頭の上からも飛んで行きましたよ。艦砲は海からも、那覇からも、とても激しかったんです。

福地の部落は、わたしたちが出た（部落）日に全部焼けてなくなったです。

芋はあっち行ったらないでしょう。石ころのところばかりですから芋は取りに行ってもありません。それで、持っていた芋の澱粉を少しずつ、水でとかして、分配して上げました。

喜屋武・福地には、六日くらいいましたかな、あんまり弾が激しいので、大変長い間おったような気がしますが、ほんとは、部落の中で三晩、畑の畦でも三晩くらいだったと思いますね。

そんなにして畑の畦に住んで、もうどうにもなりませんからここから逃げ出さなければならないと思っていた時ですね、

「裏からアメリカーが歩くよ」と叔父さんがおっしゃったから、「今まで生きて来たが、今日は、戦車の下敷きになるね」といって、子供を抱いて泣いたんですよ、その六つになる女の子を。そうしたら長女も「おっかさんよ」をくりかえし言って泣いたんですよ。

アメリカーが出て来い、出て来い、といったから、叔父さんが手をあげて出て行かれた。叔父さんはペルー帰りでスペイン語を話したんです。そうしたら、何もしないから出て来い、出て来いしたので、捕虜されて、糸満の方につれられて、それから座安・伊良波で叔父さんは別箇にされて、また野嵩の方に捕虜されました。長女は十二歳でしたが、わたしたち五人は全部無事でした。

夫のお父さんは どこでなくなったか、帰って来られませんでした。

宮平政子（二十二歳）主婦

こっちは我謝の五区というんですが、五区の防空壕は、この井戸のうしろがわにあったんです。自分のうちはこっちでしたよ。

註、宮平さんの昨年我謝の座談会での録音は、時間がなかったせいもあって、粗漏の点が多く、そのまま押し通すことは良心が許さないので、名嘉史料編集所長と共に、七十年六月九日、前ぶれもなく、宮平さんの自宅へ再録のため伺うことにした。宮平さん宅は、我謝部落の西北端、安室への通路が、丘のつきるにしたがって峡間（はざま）になり、それにしたがって道がカーブする手前になっていて、運玉丘の北面が目近に見え、「自分のうちはこっち」と示されたところは、道を距てた丘の下の空き屋敷で、井戸というのは、安室への通路がカーブしてじきの道沿いにあって、共に窓越しに見えていた。

それで五区の人はみんな空襲警報の時は、こっちに入ったんですが、激しくなったから、めいめい引っ越したんです。

それで、うちは母の実家のおばあさんの墓に引っ越したんです。運玉森を前にした墓ですが、今ゴルフ場になっているまん中に今もその墓はありますよ。それで、その壕に入った時は、うちが三人です。二歳余りの長男、誕生して間もない長女と子供は二人でした。わたしの家は、父母と数え年十五歳の妹とやはり数えで十五歳の弟の四人。おばあさんの方は、おばあさん、母の弟で三十四歳の叔父さん、叔父さんは、体が悪くて防衛隊に取られませんでお嫁さんもいませんでした。それから二十五歳のいとこ。いとこは現役であっちで戦争にも出たんですが、退役して帰って来ていたわけです。どういうわけか、現地召集はされずに家にいました。それからその嫁さんと、今年から学校に上る数え八歳のいとこの子供とで五人です。それでみんなで十二名でした。

運玉森の近くには兵隊が沢山おりましたが、四月二十九日の天長節には総攻撃をするといっておりましたが、四月二十九日になっても総攻撃がないといって、兵隊さんが、危いからもうこっちを去ったがいい、といわれたので、その明くる四月三十日であったか、五月一日であったかこの壕を立ったんですよ。その晩照明弾に照らされて、その中を隠れたりして真境名（まじきな）（大里村）に行きました。

ここに残っていたのが、父母と長男の三名ですね。父が足に怪我した関係で、うち等が壕をさがしてから連れに来るからといって、壕を出たんですがね、この三名が、わたしたちが迎えに行かない前に引っ越して来たんですよ。そうして父が途中で、頭に破片が当ってそのまま倒れたという話しでした。母と弟は、いとこが途中に迎えて、真境名でいっしょになったんですよ。

真境名は壕もなくてですね、岩に少し前へ葺き出して、擬装しておりましたが、そこでみんな知り合いの人たちばかり二十七名いっしょになったんです。

この壕には、可なり長くいたんですが直撃を受けてですね、二十七人の中十四人が死にました。疵受けて死んだのもおりましたが、

即死したのが多かったのです。

その時、わたしのお母さんと妹、お母さんはわたしと十九の違いでありましたから四十一歳、妹は数えの十六ですね。それにおばあさん、叔父さん、いとこの妻、八歳になるいとこの子供、わたしたちといっしょに運玉の壕にいた十二人のうちから六人、お父さんまで七人亡くなって五人残りました。この直撃の時にわたしも鼻をやられたんです。貫通されたんです。

註、鼻骨すれすれに左から入って右へ出ている疵跡がわかる。顔面は紙一重にふれずに、鼻の部分を貫いている。初めて見る珍らしい怪我である。

それで自分も鼻をやられていますので、お母さんを葬った時は、何も考えることができなかったのです。亡くなった人のことなど考えられなくて、ほとんど気を失っている気持ちでした。少し考えられるようになったので「もうみんな亡くなって、わたしたちばかり残って、どうしようかね、どうせ自分たちも生きられないんだから、どこかで死ぬんだ、お母さんたちはこんなに葬られて、自分たちは、葬る人もいない、そのまま死んだところにほったらかされるんだ、かえってお母さんたちは幸せだ」とこんな考えは浮びました。

空襲を受けた時ですね、直撃ですからね、自分は鼻をやられたせいでですが、何が何やらわからなかったんですが、だんだん時が経ちましてからは、「どうせ生きられない」と思っているんですが、いとこが言うままに、ついて行ったんです。

わたしたちといっしょに女の人が二人と、その女の人のお父さんと叔父さんといとこと、それだけがまじっていました。

真境名は大里村ではありませんかね、そこから、玉城村の船越に行きました。船越では、大きな家でありました。人がいっぱい入っていたんですね。そうして、うちたちが、「こっちも、もう危くなっているから前に進もうかね」と思って、昼飯を食べてから行こうとする直前に、（昼飯を準備する時に）やられたんです。わたしたちの連れの女の人が一人亡くなったのは昼飯の準備にちょっと炊事場の近くに行っていたから、疵もしないで亡くなったんです。昼飯をしないで立ったらこんな目に合わなかったんだと思いましたがね。

避難民は、一番座と二番座といっしょに、ごっちゃになっていましたがね、わたしと自分の子供は一番座と二番座の境いの敷居に坐っていましてね、また、いとこは二番座の柱を後に凭れて坐っていましたがね、いとこの向かいには兵隊が坐っていましたが、この兵隊はやられたんです。いとこは何ひとつ疵をしないんです。

爆弾でしょうかね、それが落ちたところは、二番座の裏座敷でした。そこに、西原の同じ部落の家族がいましたが、全滅です。うちの名は、「前久手堅小」といいますが、我謝では中くらいの家族で、七名くらいでしたが全滅でした。

この爆弾の落ちた家は、前に離れもあって避難民がいっぱいしていましたが、庭先にも人がいました。そとにいた人たちは、ちっとも疵を受けませんでした。二番座にいた人が多くはやられたんですよ。

弟はこっち（大腿部を示す）ですね、あんまり疵が深くてですね、どこにいたかわかりませんですがね、すぐ戸外（そと）に飛び出して来たんです。わたしも疵、足から手から怪我していますので、どうし

て出て行ったか、戸外に出ていましたよ。

それからは、いとこは、一回は壕をさがして来てから、一回はわたしたち親子をつれて行って、また一回は荷物を持って、この女の人といとこといっしょになって。女の人は、父といとこを壕においてから、いとこといっしょにわたしたち親子をつれに来ました。わたしはいとこに負ぶられて、女の人がわたしの長男を負ぶって、長女は前に抱いてくれました。

いとこと女の人とが荷物を取って来たので、弟はどうしているかと訊いたら、もう恐らく駄目だと、いとこが言ったんですからね、自分もがっかりしましたが、自分もも早や死ぬんだからと思って、何だかんだと弟のことをあまり訊ねる気分もなかったんです。自分も腿、足、手から全部やられているから。鼻は（疵のため、その影響で）わたしが言うのを意味が聞いている人にわからなくてですね、こっちが穴あいていたもんですから、うちはしゃべっても向こうがわかりませんですよ。耳もよく聞こえません二回の爆風で。

これ（中指）は先の一節は切れてこんなになっていますが、この指（薬指）とくっつけて、しばっていました。それから、こっちですね、これから入って、こっちから弾が出てこんなにですね。それから股も貫通は、そんなに痛くありませんでしたが、この指の先が痛くて、泣いてばかりおりました。脛は破片でえぐり取られました。治療なんかやりません。布で巻いたんですが、ウジが湧いたんですよ。ウジが湧いてからの痛み方は、またひどかったんです。手も足も全部ウジが湧いたんですがね。ウジが出る、何か取られるような、えぐられるようにあります。

長男は頭にちょっと、長女は足に疵していました。船越には四、五日ぐらいしかいなかったと思います。

註、宮平さんの怪我は右手、右足で、手の貫通は、掌のおや指の付け根の一寸くらい中の方から入って、手の甲の人さし指とおや指の骨の交るところに出ていて、小銃弾が通ったように、まるい疵跡がへこんでいる。股の怪我は、膝から五寸くらい上、側面の外がわから入って、斜めに内股へぬけている。向こう脛は膝から三寸ばかり下で、一辺が三寸くらいの正方形に、下の両隅からは動物の角のような形で出ている。えぐり取られたことが疵跡でもはっきり判る。

船越からは港川に行ったと思います。行くまでの途中は、弾が激しかったか、どうか、わたしはいとこにただ負ぶられて、何も考えませんし、また考えられもしませんので、わかりませんでしたが、壕に行ってからは、壕にいて、リュウサン弾とかいいましたが、弾が上の方で音がして、花火が散ってくるように、破片が飛んで来るんです。港川からは、もう食事という食事は無かったんです。真境名から持って来た米を粥にして食べたぐらいでした。芋も皮をむかないで食べました。芋取りには、いとこと女の人が行きました。自分は動くこともできないぐらいでしたからね、その時は。

船越から港川に移る時は、うちの親子をつれるために、一回しか荷物を持って来なかったので、そうして自分はそのことは、食事とか何とかは、わかりませんでした。

港川を立ったのは、朝だったように思っています。何というところを、どう通ったかわかりませんが、通りがかりに、ここは高嶺の

製糖工場だという話を聞いてですね、こっちは高嶺村だなと思ったんですよ。

高嶺では焼け残ったうちに大勢の人といっしょにいました。高嶺では別に何もありませんでしたが、疵が痛むだけですね、何もなかったんです。痛くて泣いてばかりいました。その部落が焼けたのかどうかはわかりませんでしたが、家は少ししかありませんでした。その家に大勢の人がいたので、危いからといって、喜屋武岬に行くことにしました。「喜屋武岬まで行ったら、それからは逃げるところはないから、みんなその覚悟で行こうね」といってですね、喜屋武の方に行ったんです。

喜屋武に行く時はですね、向こうが最後だから、その覚悟で行こう。人数はうちの親子三名、いとこと、この女の人と、女の人のお父さんといとこと、これだけ七名行ったんです。

それで喜屋武に行って岩の陰にいたんです。そこで四、五日は何ともなかったんですね、その後からまたこっちも激しくなったんです。弾があんまり激しいので、みんなこっちから逃げて行ったんですよ。逃げてしまったんですよ、この岩の陰から四名は。こっちにいる時にも食事は、全部いとことこの女の人がしてくれましたが、芋は、おや指くらいの小さい芋ですがね、皮をむいたらひもじいから、皮をむかないで食べなければいけないといって、こんなにして食べましょうねといって、おや指くらいの小さい芋が二つくらいしか当らなかったですよ。うちの小さい子はですね、いつもマンマンが欲しいといって泣いていたんですよ。その時この子は、疵は大したことではなかったんですよ。

この人たちが行ってから、親子三名になりましたが、わたしたちがいた喜屋武岬は、喜屋武村の同字から海の方へ行って、部落よりは海の方が近い、山の中でしたが、そこに平たい長い岩があって、その陰におったんです。

親子三人になってからは、全然食事はとっておりません。自分が怪我してからは、お乳が出ませんので、小さい子供へ乳も飲ましてやることができません。それで小さい子供は亡くなりました。わたしは手も足も怪我でありましたから抱いてやることもできないで、石の上に寝たまま死んでしまったのです。わたしは、二枚着ていた上着の一枚を脱いで、上から被うて、お母さんも行くんだから、待っていてね、といってやりました。その時は、今日は生きのびたとしても、明日になれば死ぬんだとしか考えられませんでした。

この子が死んだ翌日、この近くから人が歩いていましたからですね、この人たちについて行ったんです。その時からは、わたしもようやく歩けるようになっていましたから、何も一切持たないで、残っている男の子を帯で負ぶって、杖をついてですね、それで摩文仁の部落に行ったんです。池があったから、戦後わたしはこっちだったんだねと、そこが摩文仁だったとわかりました。昼でしたが、人が行くからこの人たちについてどこともなく歩るいたんです。弾は非常に激しく落ちました。死んだ人は、もう大変でした。墓でしたが、その墓に入ろうとしながらやられている兵隊さんもおりましたね。首の切れた兵隊さんもありましたね。道ばたに倒れている人もあれば、車のわだちの上に倒れている人もおりました。道は、あっちもこっちも、死んだ人ばかり見ていました。弾は非常に激し

かったんですが、その時は、わたしは恐いと思いませんでした。
摩文仁の部落で二晩明かしたんです。こっちに茅葺のうちが一軒残っていました。こっちでは、ぜんぜん知らない人たちといっしょになってですね、わたしは何も持っていませんから、握り飯を小さく握ったのを貰っただけで、もうその時は、わたしは食事という食事をとっておらなかったんです。親子、水もさがして飲むことはできないし、食事も、もう誰もくれる人はいなくて、握り飯を一つ頂いてこのうちからは出て、とぼとぼ歩いたんです。そうして人が歩くからうちも歩いて行ったんですね。そうしてギーザバンタの阿檀の下に隠れていたんです。そこへ行ってからも大勢の人が、その阿檀の下に隠れていたんですが、雨が降るような音がして、うちは雨が降るんだと思っていました。小雨のように、細かい雨が降ってですね、雨かと思ったら、パァッと火がついたんですよ。それで、大勢こっちで焼かれていましたよ。まるで山羊を焼いた時のように手足も曲ってですね、焼かれて真黒くなっていたんです。
わたしはこの時に、片足と片手は丈夫でしたから、この子供を引っ張って、何となく海の方に向かって行ったんですよ。もうわたしは髪なんか焼けてですね、海の方へ岩がこんなに突き出て、どれくらいの大きさの岩でしたかね、ちょっと大きい岩でした。それがつき出ていましたが、この上に親子焼き出されていました。この岩の方に行って、ああ、助かったねといって親子抱いて、ぼんやり坐って、向こうの海を見ていました。あんまり、歩ける力もないんですから、こっちで一晩だったと思いますが過しました。
このギーザバンタの岩は、岩だけ海の方へ突き出ている。下は絶壁で、すごい崖、岩の下からすぐ崖で恐くて見られないくらいですが、後は火が燃えて出られません。一思いにわたしは落ちて死のうかといった気持もあって、前に飛び出しました。
その日ですが、夕方近くなって、子供があんまりひもじいといって泣くもんだから、何かないかなと思って、その岩の上を出て、捜して見たら、大勢の人が焼き殺されて死んでいましたよ。また米も焼かれて、焼き米といいますね、あれがあったですから、飯盒からあれを取って来て、その米を二人食べたんです。食べたら、また水が欲しいといって泣くんです。阿檀の山が焼かれたのは午後でした。焼き米をさがして食べたのは、晩方でした。
阿檀の下にもぐっていた時ですね、血やら人の肉やらが飛んで来ましたよ。ビュウビュウする弾でですね、人の血とか肉とかが上から降っていましたよ。何かねと思ったですね、着ている着物にくっついていたですよ。
阿檀山が燃えた翌日、早くはなかたんですが、子供をつれて、水をさがして岩の上から行きました。阿檀の山は幅も広く、長さは、ずいぶん長いんです。それでわたしと子供が、沢山人が死んでいる阿檀山を越えてちょっと行ったら、この時にアメリカさんがこっちを巡っていました、二人鉄砲をかついで。もう今度はアメリカさんに見られたから最期だねと思っていましたが、手招きしてですね、こっちに来いという合図で、人指し指を内に曲げて、自分の体へ招くのです。それでこのアメリカさんたちの後について行きました。このアメリカさんたちも、わたしたち親子を見た時は、驚いていたようでありました。ついて行ったら、大勢の捕虜がいたんです。

そこから車に乗せられて、百名へつれられて行きました。向こうで、疵の治療して貰ったので、痛くなりました。治療は、最初に、水道のホースで水が出ますね、あんなにして洗ってから薬をつけて、繃帯で巻いたのですが、それからは痛くありませんでした。最初に洗ってくれたのはアメリカ人で、薬をつけてくれたり繃帯巻いてくれたのは沖縄の女たちでした。
虜捕になったのは、玉砕の翌日、先には玉砕は二十二日といっていましたね、その翌日が二十三日です。
百名についたのは、午後二時頃だったと思います。沖縄の人たちが握り飯を配っていたんです。握り飯は子供しかありませんでした。うちからは無かったんです。また炊いてから配るから炊くまで待ちなさいといって。握り飯の味といいますと、ほんとにおかしいんですよ。（笑い声）それでこの子供のから少し取って食べたんですよ。ほんの少し分けて食べたわけです。
そうしたら、うちの子供がわあわあ泣いたんですよ。わあわあ泣いたもでんすから、わたしは恥かしくてですね、それを何とかして機嫌を直そうと大変でした。やっとなだめて泣くのをやめさせましたが、その時のひもじさというと、もう恥も知らないくらい、何日も食べていませんから。
それから、こっちの壕で一番いいモンペを着て行きましたが、これは最後までずっと着ていました。
そうしてですね、虱が大変でした。髪は一本一本、虱の卵ですね、ずっとくっついていたんです。タオル一枚さえ持っておれば、散髪してこの虱を無くしようと思ったんですが、タオル一枚もなかったんです。それで毎日虱取るのが仕事で、朝起きると虱取りです。
その時、何も持たなかったんですよ。櫛も持たなかったんですよ。だから髪もそのままですね。被るものも何にもない、何一つ持ったものはなくて、わたしを知っているんだが、わたしたちがこっちにいる話を聞いて来たのに、どこにいるのかねと、すぐ目の前にいるのに格好があまり髪ももじゃもじゃしているので見分けることができなかったんです。
何か持ちものができはじめたのは着物ですね、この着物が最初のものでしたが、これができたので、この着物を着てモンペを洗濯しました。それは誰から貰ったか、いっしょにいた人でしょうがよくわかりませんね。だいいち櫛を持っていないので髪がパサパサしたんです。
虱は、どこら辺から出はじめたかわかりません。疵が痛くて、虱のことは気がつきませんでしたが、疵の治療して痛くなくなったら、ひどく虱が出ているのを気づいて、毎日虱取りをしたのでした。
主人の兄弟は、男六人、女二人ですが、女一人は、ブラジルに行っておられます。長男は徴兵の時に亡くなったそうでありますがわたしにはよくわかりません。次男はペルーですが、この人はペルーで病気で亡くなっています。三男も亡くなっています。こっちで戦争前で戦争とは関係ありません。沖縄戦直前は主人の弟がですね、二人いましたが、五男と六男ですね。長男は召集されて、大阪に終戦後行ってあっちで亡くなっています。六男が、徴用で行ったんです。そのままです。その子は、帰って来ません。どこでどうなった

かわかりません。

主人は四男です。防衛隊とはちがって、あの人は支那事変で現役で行って来た。帰って来てから結婚したんです。それでまた子供が二人できて、下の子が来月は誕生日という時ですね、九月に召集されたんです。沖縄戦の一番召集に、名護三中に集合、戦死した場所は浦添村内間、球部隊、北中城島袋から与那覇に移って来たんですね。与那覇からどこに移ったのか、もう艦砲が始ったのでわからなくなりました。

与那覇近くに来ているから何かおいしい物をつくって面会に来てくれないかといって来ていましたので、行こうとしていたが、艦砲が始まっていたので行くことができないで、それっきりになりました。敵が上陸した時からは、こっちにいたんです。

主人のお母さんは戦前になくなったので、お父さんは、後のお母さんを娶って、戦争中は自分の墓を壕にして入っていましたが、そのお母さんは、墓で艦砲か何かで亡くなったそうです。お父さんは戦後に亡くなりました。

この家は、我謝に分家があります。こっちが、長男だそうです。

そうして、わたしの主人は、四男でペルーは次男ですが、ペルーには男が大勢おりますので、この家をつぐと思っているようですが、わたしの方に、この屋敷に家を作りなさい、といって来たので、うちをつくりました。このうちをつくってもう三年になります。

註、宮平さんのお宅がしょう洒な近代建築なので、二十二歳の未亡人故、再婚されたのでないかと、再録音をこの家でお願いしていいものかとためらった。しかし、心よく応じられたのでずっと未亡人を通されたのでないかという考えと、立派な建築とが混沌としていたが、最後のお話しによって、二十二歳から戦争未亡人の節を全うされていることがはっきり判り、しかも二十二歳時代の若い気持ちを保っていられることを思い、自から頭の下る思いがした。

新垣キク（三十七歳）主婦

わたしは当時那覇にいたんです。甲辰小学校のうしろの方です。空襲だといって壕に入っていたんですよ。そうしたらある兵隊さんが「おばさん、今度の空襲は空襲ではないよ、上陸するよ」と教えて貰ったわけです。

「そうかね、それでは子供たちは田舎においてあるから、急いで行って、何とかしないといけない」と言って、急いで、子供たちのいる西原へ行かねばいけないと考えたんです。

「おばさん、今度の戦争はね、中頭で戦うんだから、あんた方は、今からでもおそくないから、早く国頭へ逃げなさい」。

その兵隊さんは別に知った人ではなかったんですが、そう教えてくれたんです。

「慶良間に上陸しておるから、この次ぎは中頭で戦うからもう大変ですよ、敵弾にも味方の弾にも、恐いから早く逃げなさい」。

それで、わたしは、二人の子供をかかえて逃げることにしました。長女は十八、次女は十五で女の子二人ですね、長男は十二歳でしたが、おばあさんについて、どうしても誘われなかったんですよ。

それでわたしは、食糧も何も持たないで、子供たちをつれて国頭へ逃げたですよ。アメリカが慶良間に上陸していた時でしょうね。

「戦争がすむまでは、水と松の葉とでも、生きられる限りは、生きていこう」といって、行ったんですよ。行く時に叔父さんとあったんです。わたしの母の弟です。そうしたら叔父さんは、「叔母さん（おじさんの妻）たちは金武の壕にいるから、あっちをさがして行きなさい」と言われたから、「じゃ、そうしよう」といって、シズ叔母さんをさがして行きました。そうしたら、叔母さんは、「あなたたち、食糧を持たないから、西原の疎開先は、久志村の汀間・瀬嵩だからあっち（行きなさい、あっち行ったら食糧もあるよ」といわれました。よく憶えていないけれども、金武の壕に、それでも一週間か、それくらいいたんですよ。

こっちで一番悲しかったのはね、乳呑み児をつれている人は、みんなからとってもいじめられておったんですよ。「あなたがた二人のために、こんなに大勢の人を犠牲にするなんてあんまり気の毒でないか、二人だけ犠牲になって、外へ出て行って、死んだらどうだ」というてね。それでわたしはそれを聞いて、「よかった、小さい子供もいなくて」と思ったんですよ。しかし、小さい子供たちは、ひもじいから、ぎやあ、ぎやあ、とても泣いているんですからね、壕の中でですよ。

わたしたちも叔母さんに、食糧持ってないから汀間・瀬嵩に行きなさい、といわれたものですから、金武を出て行ったんです。叔母さんの方でもわたしたちは食糧を持っていないから、一人でもない三人だから、いっしょにいるわけに行かなかったんでしょう。

そうして、汀間・瀬嵩に行ったら、食糧はないでしょう、これからもう大変だな、子供たちにくれる食糧を少しも持っていないもんだから、と思ったんです。上の子は泣かないけれども、下の子は泣くんですよ。「お母さんと来なかったがいい、食べるものもない」といって泣くんですよ。仕方がないから、わたしは盗んでやろうという気が出たんですよね。そうすると汀間・瀬嵩の人たちは、自分の畑のものを取られるかというので、みんな監視していたんですよ。

「西原から、みんな泥棒が来ている」とか、何とかいうんですね。ある一人の人は、軍人あがりといっていたけれども、わたしはどうしても忘れられないんですよ、その人が。民間の物を盗ったら殺されるから、学校の生徒がつくったものを取った方がいいと思って、学校へ行って、芋を盗もうとしたんですよ。そうして行ったら「何で？西原の人はみんな泥棒だね、人のものを取って」というんですね、それで、思いきって言ったんです。「だって、仕方がないんですよ。わたしたちはお金は持っておるけれどもね、買うところもないし、子供を二人かかえているので、わたしは死んでもいいけれども子供たちが泣くのを見ておられないから盗みに来たんですよ」といったら、「何で？半分は死なないと戦争は勝てないんだ」とこの人、軍人上りという人がいうんです。「そうかね、半分は死なないと戦争は勝たない、こんな情けのない人もいるのかね」といったんですが、しかし、そういっても仕方がないさといって、この人をわたしは怒っていたけれども、「いいさ、もう、学校のものも

くれない、みんな監視しているんだから」という気持になったんですが、そうしたらもう食べることにとても困ったわけです。

しかし、わたしたちは、おるところも、人の家において貰うことはできませんで、山の中にいました。小屋なんかつくることはできません、山の中に、木の下にいました。

そういうことで、わたしは、子供たちをつれて来て、食べさせるものがないので、あんまり可愛想になったんです。それで、山の中に何か食べられる木の実はないものかとさがして見ました。そうしたら、グミ（ツルグミ）が見当りました。グミといって、山の中にこんなにして小さい、実があるんですよ。グミの木があったからこれで 助かったというて、 わたしは木にのぼって、 グミを取りました。そうして、子供等のところへ帰って、水も飲みなさい、グミも食べなさいよ、とくれました。

それでも、グミと水だけでは、生きられませんから、わたしは、やはり盗みを考えたんです。瀬嵩の山の中に子供たちを置いて、部落へ泥棒しに、何か食糧を盗みに何回も行ったんです。一度は酷いことを言われたんですが、巧い具合に、いつでも盗んで来おったんですよ。人に見られないで、芋を盗んで来て食べさせて、そうして、無い時は我慢させておいて、あってもそんなに自由に食べないで、グミでない木の実もさがして来て、それを食べさせて、芋は一日一回煮て食べさせたんですね。鍋は持っていません。あっちへ行く時金武で、兵隊さんがいたから、鍋を持たないので、何か煮る鍋がわりにするので、 罐詰の空がらを一つ下さいませんか、 といって、それを貰いまして、いつでもその罐詰の空きがらを鍋代りにしていましたが、それによく煮えましたよ。鍋はそれ一つです。

瀬嵩の山の中にいた時ですね、ただ木の下に坐っているのですからね、夜どうし雨が降った時があったんですよ。それでびっしょり一晩中雨に打たれて、濡れていましたよ。それでも、明くる日は大変いい天気になったんです。

このわたしたちのいる瀬嵩の山の中に、ある時、防衛隊が三人逃げて来ていました、わたしたちの前に。その人たちはコザの近べんの人たちですよね。

「兵隊さん、仕方ないから、わたしは子供たちを飢え死にさせてもいけないから、死ぬんなら死んでもいいから、もう帰ろうじゃないか、どうせ死ぬんであったら、自分の土地へ行って死んだ方がいいよ」といって、 そうしてその 兵隊さんについて、 わたしたちはもう、汀間・瀬嵩の山から歩き出しました。

泊っては歩いて、歩いては泊って、歩いていると、こっちの海が見えるから中へ入って、また歩いたらあっちの海が見えるから、また中に入る。

山の中ではね、ハブ（猛毒の蛇）もおるでしょう、だから死にたい気持ちはあっても、ハブは恐いから、寝る時には、子供たちをこんなにして一人は坐らして、一人はこんなにしてみんな重ねて。毎日、毎日、山の中を通って来たんですよ。通られないところもあるし、そうして、夜は、こっちは危険だから通れないといったり、何か線が通って あるところ、 それでも夜通らないといけないでしょう、だからみんなこうして、こっちの帯をつかまえて、こっち放したらもう大変よ、今、ドマングィネー（驚いて正気を失っては）一

大事だよ、お前はわたしの帯を掴みなさい、といったあんばいで通った。

恩納岳といったかな、友軍の壕が、靴も靴下も、ずるずるになっていたが、あっち行って、その壕から米を盗んだ。米があったんですよ。

そんなにして、汀間・瀬嵩の山を歩き出してから、一週間くらいして、兵隊さんたちについて、石川まで来ました。石川からこんなにして石があるから、あっちに来たんです。

せっかく命を助かるために汀間・瀬嵩へ逃げたんですがね、あっちにいたら、飢え死に するんですからね、それで 同じ死ぬなら、仕方がない、自分の生れた土地に行って死んだ方がいいからといって、兵隊について、石川来たら、今度は石川のあっちの部落は何というかね、こんなにして 道があるから、 ここいらは 石川ですって言われて、そうしたら、そっちからはじめて 死んだ人を見たですよ、アメリカーやら。石川の手前の小山で四、五人ぐらい、みんな死んでこんなにしているでしょう。

「アッサミョー（感嘆詞）ここでこんなに戦かったんだなあ」と思って、そうしてこれから先は、山がないでしょう、それで石川からは隠れるところないから、 わたしは 先頭になって、 子供たちへ「あなたたちは万一の場合は自分がしのがれるだけはしのいで、生れ島に行きなさいよ」といって、わたしが道を越えようとしたら、すぐアメリカーにつかまえられたわけです。アメリカーにつかまえられたもんだから、殺されると思っているんですよ。だから子供たちを合図しなかったんです。アメリカーは、わたしにチョコレートとマッチをくれた。わたしは「これ等がわたしをどこかにつれて行って、自分勝手なことをしてから死なす考えだろうなあ」と思っていたんです。そんなに死なさないで、捕虜にするのであったら、子供たちも振り返って、つれて来たけれども、死なされると思った。つれられてまあ、わたしは石川に行ったんです。

それから子供たちと別れている自分は、とても苦しんでくらしていたんですが、子供たちは、兵隊さんについて、コザまで行っていましたよ。一か月くらい 別居だったんです。 その別居の時 には、「逃げて行って死のうかね、子供たちとも別べつになっておるし、生きているのがいいか、死んでしまった方がいいか、また、万一子供たちがどこかに生きていたら、子供たちは苦しむはず」といって死に切れなかったんですよ。逃げて行くこともできなかったんですよ。子供たちと別個にされても。

そうしたら、軍作業になってから、人の話で、子供たちが生きていることがわかって、さがすことができたんです。それが何月の何日であったか、わかりません。

石川へ行ってからは、食べるものは、わたしはよかったけれど、それで、こんなであれば、子供たちをつれて来ればよかったのに、といつもそれを思ったんですが、もうどうにもならないでしょう。泣いても誰も行ってくれる人はいない。自分は狂人（きちがい）のようになっても誰もいたわってくれる人もいないし、一番辛かったのは、子供たちと別個になったので夜も眠られなかったことでした。

それから末っ子の男の子のことですがね、小橋川小（屋号）の三男が古知屋の開墾から出て来て道を歩いていたんですね。その時は

道を歩いていると、みんな摑まえて、金網の中に入れられるんです。それで、小橋川小の三男も摑まえられて金網の中に入れられました。

それでわたしは、かわいそうに思って、「わたしの身内だから、わたしが責任持つから何卒出してくれ」と頼んで出した。そうしたら、「ねえ、おばさん、あなたがたのセイ吉もおじいさんも、古知屋開墾に居るよ。しかしセイ吉はマラリアかかって、病気して動きもできなかったよ、おばあさんは死んで、セイ吉とおじいさんがいる」と小橋川小の三男が知らしたわけです。

「そうか、生きているか、それでは、わたしは髪を切って、この子をつれに行こうかなあ、頭を切って男のようにして、男の靴を穿いてその子供をつれに行こうかな」と心は思っていたんですよ。そうしたらまた、古知屋開墾から作業隊をつれて石川からも作業隊をつれて、運転はアメリカーがして、あちこちから作業隊をつれてくる兵隊さんがいたんですよね。わたしが道を通りかかった時、「あの車は、古知屋の開墾への作業隊車だよ」と余所の人にいわれたわけですよ。それで、石川の作業隊を下して、アメリカーは運転しに行ったから、わたしは誰にも言わないで、すぐ飛びついて、さがっていたわけです。そして車はすぐ動き出したけれども、ぶら下ってぶらぶらしていたんです。そうしたら「大変だぞ、大変だぞ、下りなさい」といった。わたしは、「下りられないよ、わたしは古知屋に大事な用事があるから、そっちに上らせてくれ」といったら、皆が手を引っ張り上げて、古知屋開墾へ行って、子供を石川へつれて来たわけです。もう一、二週間もそのまま放って置いたら、駄目だったかもしれません。

おじいさんもおばあさんも、わたしの息子も三人、ばらばらだったそうです。

それでおばあさんは、どこでどうして亡くなったかわかりません。

わたしの息子も、自分ひとりであちこち歩いているのを、人について歩いていたそうです。それでこの子が助けて貰った人が、こっちにいるんですけれどね、見たら、シンニシ小（屋号）のセイ吉だからといって、連れて歩いたそうです。

古知屋開墾でもおじいさんと偶然いっしょになったそうです。

城間勝弘（十六歳）　工業学校生

わたしの場合は、当時学生でありましたので、それで中等学校（現在の高校）では、米軍が上陸しない前に、鉄血勤皇隊が組織されて、通信隊に配属される生徒は、シマブク部隊に配属されたわけです。自分の場合は、通信隊には行かなかったですから、学校の配属将校から、戦況が悪化したら、非常召集するから、あなたたちは、うちで待期していなさいということで、うちに帰されたわけですよ。

それでうちに帰って家族といっしょになっていたんですが、戦況が激しくなったもんですから、うちの墓は池田の方にありますが、お墓を開けて、おばあさんが以前に亡くなっていたもんですから、おばあさんの遺骨を洗骨して、そうしてその自分の墓に避難しておったんです。

食糧もお墓の方へ持って行ってなかったもんですから、夕方はうちへ帰って、食糧といってもお芋しかないんですので、うちで煮て、それを壕へ持って行って皆で食べる、そういう風に生活をつづけていたんです。

壕生活をはじめて四、五日後、猛烈な艦砲射撃があったもんですから、うちにも昼は帰ることができなくて、その夕方帰って見たら、この我謝一帯は焼け野原になっているので、落胆しました。もう早や昼は壕から絶対に出られない状態でしたもんですから、ずっと壕生活なんです。水もバケツいっぱい汲んで来て、そこで芋を煮て食べて、また芋が煮られない時には、黒砂糖を食べたりしておりましたけれど、ちようど二十年の四月二十九日、天長節、よく記憶していますが、本土出身の兵隊さんが、「もうわれわれは切り込みに行くからあなたたち ここは危くなる、ずっと島尻の方に避難した方がいい」と注意されて、そうかなあ、といって、「本土の兵隊さん、しっかりやって下さい」と激励したんです。それで二十九日の晩、運玉森のうしろがわの壕に避難したわけでした。

そこへわれわれが行って三日目でした。島尻郡は山部隊が警備を受け持つといって来ました。それで本土の兵隊さんが、「ここで天一号作戦を敷くから、ここで日本軍が負けた場合は、もう沖縄戦は日本軍の全面敗北だ」という話を聞かされました。

それで山部隊から、石部隊ぞくぞくとこの運玉森の周辺に、何千名という兵隊が集結したわけですよ。それで、弾薬から、あるいは兵隊の荷物から、民間の避難民の入っている壕を片っ端から立ち退かして、それ等の物を入れるわけです。

「ここは沖縄戦のほんとに重要な地点だから、あんたたちは、安全な知念村やあるいは玉城村の方面に行きなさい」という風に追いやられて、出されたんですよ。このように、山部隊の兵隊が集結したんだから、自分等はその壕から追いやられたわけですよ。

自分等の家族は、母と、わたしは次男で十六歳、長女が十四歳、三男が十二歳、四男が八歳、五男が六歳、末っ子が次女で七名でした。

それでこの七名が夜の八時か九時だったと思いますが、その壕にいた避難の人たちといっしょに出て、しかしじきに散りぢりばらばらに、島尻方面をさして行くわけでした。わたしは当時十六歳ですから、荷物を二つの畚に入れて、棒の両端に下げて、担いで行ったんです。道もどこやらはじめてわからないし、おまけに夜で見通しが利かないので家族とはぐれてしまったんですが、それでも人にまじって、夜通し歩いて、夜明けに辿りついたところは、大里村の大城部落でした。

そこで自分の家族を捜そうと、昼中は、弾の中をあちこち歩き廻ったのですが、でも心細い気持ちはなかったですね。二日目には、東風平村の八重瀬岳で、家族を見つけていっしょになりました。

この八重瀬岳に行ったのは、大里村大城部落の四方八方捜して見つからないところから、同じ部落の人たちのところへ戻って行ったら、この同じ部落の人たちが、八重瀬の方にも我謝の人がいるから、向こう行って見ませんかといわれたので、荷物はこの人たちに預けて、八重瀬に行ったわけです。

それでわたしが行ったらお母さんは泣いてですね、もう、弾がこんなに激しいし、どこかで死んだんだろうと思っていたそうです。

それから荷物を取りに、昼ですから、甘蔗畑に隠れたりして、荷物を取りに行ったんです。そこに二、三日壕にいたが、艦砲が激しいので、戻って玉城村の前川ガラガラーへ行きました。この前川ガラガラーは、三、四百名も収容できる大きな壕だったんです。兵隊は一人も入っていませんでした。

そこの班長が、具志頭村の 新城の方でしたが、「元気のある方は、友軍の食糧運搬に行きませんか」と呼びかけました。友軍に協力すると、二升ぐらいずつのお米の配給があるということでしたので、わたしもそれに応じて行きました。行ったところは、真壁村になりますかね、米須部落の壕から、具志頭村の与座・仲座ですか、そこに大きな野戦病院みたような壕があったんです。そこまで三十キロですかね、米俵を持って行ったことがありました。向こうへ着いたら、米を二升ずつくれました。しかし一回だけでしたよ。

前川ガラガラーへ帰って家族といっしょにいますと、雨季ですから、雨がしとしと降りつづきますし、おまけに艦砲がここも大変激しくなりましたので、とどまっていることはできません。

それで、今度はずっと南へ下ろうということになって、今ひめゆりの塔のある部落、伊原へ行きました。そこは、うちも残っているんです。部落の人たちもいて、一屋敷に、三十名くらいずつ避難しているんです。うちの中で、お鍋で飯を炊くこともできました。そうしておりましたが、ここはまだ激しくはなかったんです。

そこへ来て五日ほど経ってからでした。わたしたち同じ我謝部落の人たちが入っていたところに、艦砲の直撃を食ったんです。瓦葺きの家でしたが、屋根に当ってですね、屋根は打ち落されて、中にいた人たちで、三十名くらいが亡くなったんです。怪我した人も相当にいたと思います。うちの母と、五男が亡くなりました。五男は、長女に背負われていましたが、爆風で即死しました。母は胸に破片が当って即死でした。一番末の子は母が抱いていましたよ、その末ッ子は泣きながら、死んだ母のところにいました。煙が立っていましたが、わたしは、そこへ飛び込んで行って、この末っ子を救い出して来ました。煙はもうもうとしていたんですよ。

それで 自分等は隣りの屋敷に 避難しましたが、 母がやられた家は、その翌日も艦砲が来て、その時に焼かれたんですよ。あっちで疵を受けて、身動きもできなかった重傷者は、生きていながら、逃げることもできないで、そこで焼かれてしまったんですよ。多分そういう人が四、五人いたと思います。

それで、その時は、自分等も、途方にくれて、もうこれはとうてい生きのびることはできないと感じたわけですがね、うちも全部焼かれるし、石垣も向こうの石垣はつみ重ね方式ですがね、ちょうどいいことに、そこに古畳があったんです。それで、それを石垣の上にのせて、また両方石垣をつんでですね、まあ二日くらいそこに隠れていたんですよ。そこに弾が来たらそのままだなと思いましたがね、でも破片をよけることは大丈夫といって、そこに隠れていたわけです。その時分は、生きた心地はなかったんです。

この石垣に畳を置いて二日ほど 隠れていると、 夕方から、 負傷兵や、避難民がぞくぞくとやって来ました。そうして、どこへ行けばいいかわからないといった群衆ですね、ところが不思議なことに、艦砲も迫撃砲も、ぱったりやんだんですよ。

そうしたらアメリカの飛行機から何回となく宣伝ビラを撒いたんです。「避難民は東の方に行きなさい、その間は 艦砲射撃はしない」、ということですね、この宣伝ビラは沢山撒かれたんです。

それで疵ついた四男をおんぶして、摩文仁に一泊したんですが、そこでも夜昼となく、艦砲射撃はほんとに激しかったんですよ。そこにまた宣伝ビラも落ちて来ましたが、二世だったでしょうね、与座・仲座の方へ行きなさい、そうしたら艦砲射撃もしないから、とマイクで呼んでいました。それで僕等も半信半疑で、そうかな、と思いながらも、行ったら殺されるんではないかな、と感じていたんです。しかしみんなぞくぞく与座・仲座の方へ行くので、わたしたちもついて行ったんですよ。

摩文仁から与座・仲座までの距離は三千メートルくらいあるんじゃないですかね、そこの道路はですね、兵隊やら避難民やら、もう道幅いっぱい死んでいるわけですよ、それを跨ぎつづけて行ったんですが、与座・仲座の方では、米軍が、蛸壺のようなものを掘って、それに機 銃を構えておったんです。そこでわれわれは捕虜になったんです。

そこへ行ったら何百名という避難民が収容されてですね、そこから全部、トラックに乗せられて、富里・当山の収容所へまた行ったんです。そこで疵ついている人は治療を受けるし、また米軍の携帯口糧ですか、それも貰って、一晩はそこで過して、そのつぎの日は、百名を通って志喜屋まで来たんです。そこにずっと留まって、一か年ぐらい過したんです。志喜屋行ってからは食糧も豊富にあったんです。

母が死んで後は、生きてよいか、死んでいいかという心境だったですが、でも、生きようとする気持ちはあったんですが、こういう戦況なら、自分たちが生きのびることは駄目だろうという気持ちもあったんです。

道を歩く時には、一番末っ子は長女がおんぶして、四男はわたしがおんぶして、志喜屋までは来ました。

志喜屋で、小さい弟妹は二人、栄養失調で亡くなったんです。四男と末っ子の次女の二人です。

自分の母と五男は、捕虜になる前に葬ってありましたから、志喜屋にいた時に、遺骨を取って来ました。

母が亡くなったので、心の支えを失ったということはあったにちがいありませんが、その時は四男が怪我していましたので、それを世話することに心が向いたんでしょう、あの時は、母を悲しむ気持ちも、そのゆとりもなかったんです。一度に三十人も、あっという間に死にましたから、生き帰っている人たちは、その場合は、もう人間的な心もその時からなくなって、ただ母と五男を葬ることだけが一生懸命だったと思います。

伊原へ行ってからは、持っていた食糧は、少しも残っていませんでした。

捕虜になろうという考えで行ったのではありません、捕虜には絶対にならないという考えは学校でも教えられていましたから、捕虜になれば殺されるものと考えていたんです。

捕虜になったのは、何が何やらわからなくなっていたので、ただ人の行くのについて行ったわけです。

それで捕虜になった時は、はッとなって、厄介なことになったなと思いましたし、殺されるんだとも思いました。殺さないんだなと思ったのは、アメリカの人が怪我人の治療をしているのを見た時からでした。

小橋川　要　好（三十七歳）　西原郵便局員

戦争が近づきましたので、翁長の部落に家を借りて、こっちと行き戻りして仕事をしていましたが、あまり激しくなったので、郵便局は解散になりました。日は憶えていませんが、四月何日頃でありましたか。

わたしたちの壕は池田にありましたよ。それで郵便局が解散になると、すぐ壕に入っていました。壕には可なり長い間いましたが、村からの避難命令が出ましたので、こっちにおってはいかないということで、島尻の東風平に行きました。東風平では、西原の製糖工場のとり計らいで、西原の壕と、そこの五中隊の壕と交換して入っていいというので、五中隊の壕に入っておりました。

こっちから行っては、東風平は、戦争はなくて、小城という部落に行って、馬車に甘蔗を積んでしぼって来て、砂糖もつくったのでしたが、しばらくすると、艦砲が始った。わたしたちが行って、五、六日経った時でした。壕の入口に艦砲を撃たれて、ここで三十名ばかりの人が一度に死にました。

またこっちから軍について、浩川から艦砲撃っていますから、東風平の同宇に下った。そこでは、部落の人が掘ってある壕に入っていましたが、そこにも長くいられないからといって、小城の山のところに五、六人入れる小さい壕を掘って、そこに入っていましたが、もう四、五人入る壕をつくっていると、飛行機が、旋回して飛んでいるので隠れていると、そのそばに艦砲を撃ち込まれた。わたしたちからは女の子、三男伊佐（屋号）のかまどと、それだけであったが、艦砲が落ちたので直撃ではなかったが、壕が潰ぶれて、二人はまったく見えなくなった。わたしは胸元まで埋められていたが、土の中から匐い出て、娘たちは髪が見えているので、窒息しない中にと思って、急いで掘り出しました。怪我はしていませんでしたが、戦争は恐いもんだと……、東風平での一番恐かったのは、そこでの艦砲でありました。

わたしの家族は、わたしたち夫婦に、十八歳の長男、十六歳の長女、次女が十三歳、三女十一歳、次男六歳、三男三歳ですが、十八歳の長男は、防衛隊に取られて、戦争に行きました。それでいっしよに歩いたのは、七人でした。

それから、ここも艦砲射撃が激しいので、玉城村の前川に行きました。あっち行ったら艦砲は、ますます激しくて大変でした。それで、あっちにいるのはこっちがいいというし、こっちにいるのはあっちがいいというし、何が何だかわからない。こっちからあっちへ行くのもあれば、あっちからこっちへ来るのもおる。すっかりドマングテ（何が何やらわからない、動転すること）そこで、親戚の子供と、ゼン次郎が壕を捜すために、ここでやられた。それで、艦砲があまり激しいので、何が何やらわからないから、具志頭村の与座・仲座へ行った。与座・仲座も行ってじきは大したことはなかったが、二、三日したら艦砲が激しいので、恐くていられない。ここから真栄平へ行って、そこで二日ばかりいましたが、またここも艦砲があまり落ちて来るので恐ろしいので新垣へ行きました。こっちも弾は雨のように降って来ましたが、三日いました。そこにもいられないから、大渡・米須を通って、喜屋武に行きました。喜屋武の字までは行かないで、海岸の阿檀垣の中にいました。

そうしたら、そこにいる兵隊たちは「お前たちは民間人だから、殺さないだろう出て行く方がいいよ」というのもおれば、出て行こうとするものを手榴弾で殺そうとする兵隊もおるし、何が何やらわからない。

その時はひどい雨が降るんだが、兵隊には、両脚切れて、手でお尻を引きずって、自分の隊をさがしているのを見ました。それを見て、戦争というものは、恐ろしいものだと思いました。

雨にはずっと濡れているんですが、それは当り前のことで何でもありません。もうその時からは、原っぱに出て行って、艦砲に当ってでもいい、いつ死んでもいいという気持ちになりました。

この阿檀垣の中には二日おりました。食糧は少しも持っておりません。艦砲があまり来ない夜になってから、甘蔗を畑に行って取って来て、その甘蔗しか食べていませんから、わざわざここから出て、野原で、捕虜になりました。六月の十九日か二十日でした。

アメリカの兵隊がチューインガムをくれましたので、食べました。毒が入っているという話も聞いていましたが、毒が入っているのを忘れてすぐ食べました。

それで座安・伊良波へつれていかれて、そこで家族と別べつに分けられて、家族は石川へんへ行ったらしく、わたしたちは、今の種畜場のあるところへつれて行かれました。

そうしたら、一人ひとり呼び出して、今度の戦争は、日本が勝つのか、アメリカが勝つのか、日本が勝つならどうして勝つか、アメリカが勝つにはどうして勝つか、このように訊いていました。わたしは、わからん、わからん、知りません、と答えましたら、これはニミッツ司令官からの命令だから、みんなの捕虜に訊かねばならないといいました。

そこには四、五日くらいいて、金武の古知屋潟原に移されました。マラリアはありませんでしたが、食糧は大へん少なかったです。

阿檀垣の中にいた時が、一番苦しかったと思います。あの時は、甘蔗ばかりしか食べていませんから、もう、どこにでも、明るいところで寝て休もう、という気持ちになっていました、あの時からは。

死んだのは三女だけです。三女があまり水が欲しいというものですから、海の方の水の出るところへ水汲みに行ってやられました。弾に当って、すぐ死にました。石川から西原に移動して来てから、やられた三女の遺骨を取りに行きました。遺骨はありました。みんなごっちゃになっていましたが、ありました。目じるしといってはなかったが、頭がわかりました。その場所を見ていましたから、いとこといっしよに行きました。いとこの子供は死に切れないで、背負って出ようとしましたが、弱っていたので、そこにそのまま置い

て出ましたので、そのまま骨になっていました。わたしの子供は、すぐに死んだが、いとこの子が、いつまでも死に切れなかったんです。

食糧もない、水もない、こうして死ぬより水を飲んで死んだ方がよいと思いました。

長男は十八歳でしたが、防衛隊に取られて行きまして、帰って来ませんでした。どこで戦死したか、ぜんぜんわかりません。防衛隊だから、皆の話をききますと、弾を運んだり食糧を運んだりする仕事ですから、そういう時に弾に当ったのでしょう、帰って来ませんでした。

呉屋嘉真（二十三歳）　二十二年九月復員、現我謝区長

上海（しゃんはい）から本土へ帰ったんですが、本土で、沖縄は玉砕と聞いていたもんですから、人はほとんどいないものと考えていましたが、那覇の港について、非常に感じたことは、港に作業員なんか、沖縄の人が多いでしょう、それでうちの家族は九名でしたから、多分残っておるものもおるんではないかと、こう思っていたんです。

それで帰って見たら、何ですね、収容所は久場崎にあったんです。久場崎に行く時は、与那原を通って、我謝（自分の部落）の下を通って行ったんです。我謝の下を通る時にですね、標準屋といってですね、標準家屋の茅葺の家が相当にできておったんです。それを見たもんだから、玉砕したといってもこんなに家ができているから、話のように酷くはなかったな、とこう考えておったんです。

そうして久場崎に一晩泊っておったんですが、うちに帰って見たくて、逃げて帰りたい気持ちでしたね。一晩でしたがその夜は、ほとんど眠れんで、翌日トラックでですね。旧役所の前で下されたんです。下りて見たら我謝の人で、新垣セイ太郎という人が、この引揚げ者が来たもんですから、迎えてくれたんです。引き揚げ者が来る時は、トラックの前に沢山の人が集まっておるんですね、自分の親戚や誰かが来るのではないかといってですね。

その時新垣さんが来られてですね、「元気でしたか」と声をかけて下さったので「あなたがたもお元気でしたか」と挨拶を交わしました。

そうして、家族の安否がきき度いもんですから、それで訊いて見ましたら「もう貴方の」といって言葉を止めました。言いたくなかったんでしようね、それでわたしは、その「もう貴方の」ということで、家族は誰一人残ってはないものと考えました。

家族は僕を含めて九名です。兄弟が六名、おばあさんと両親ですが、僕が一番上ですね、二十三歳の僕から六男まで全部二つちがい、次男が二十一歳、三男が十九歳、四男が十七歳、五男が十五歳、六男が十三歳です。

新垣セイ太郎さんの暗示みたいな言葉によって、全滅だと思っていた家族は、四男が残っていました。姉も嫁に行っていましたが、それもいっしよに亡くなったんです。

家族は誰一人残っていないものと新垣セイ太郎さんの暗示で思っていましたから、四男が一人は残っていることを知って、一人でも

残ってくれていれば幸いだという気持ちになりました。

それでまあ、何です。僕がこれからは親代りになっていかねばならなくなりましたから、四男と話し合いました。

もう兄貴が帰って来たから何も心配することはない、二人で頑張って行ったらどんなこともできる、お父さんお母さん、それから死んで行った兄弟たちのことも、立派に祭ってやろう。兄貴が帰ったんだから、お前は何も心配はしないでいい、と言いきかしましてですね、そうしましたから、弟も非常に喜んでですね、翌日からは、ほんとに一家揃っていた時のように幸福にかえった気持のようでありました。

次男は現役で石部隊に行っていたそうです。三男は防衛隊に行っていたそうです。四男も防衛隊に行っていたんですね。

この四男が残ったのは、防衛隊に行って、家族とは、はぐれておったから生きのびることができたらしいんです。

家族は、あの新垣でですね、あっちで全滅しています。直撃だったらしいんです。新垣は、もう家は残ってなかったらしいんです。

部落の上の岩のかげにおったそうです。

僕は帰って来て五か月ぐらいしてからですね、家族の目じるしになるものがあったらさがせるかと思ってですね、行ったんですが、もうその部落はですね、そこに戻っている人なんかもいたんですがね、部落の上の方の山なんか、まだ遺骨が相当にあってですね、あちこち散らばっておるもんですから、あってもわからないくらいでした。

一度にみんなが亡くなったそうです。姉の子が一人残りますが、いくつなっていましたかな、まだ七つ八つですか、それがいうには、母（僕の姉です）一人は、腕をやられて、しばらく生きていたそうです。

それでそこで一度に亡くなったのは、両親におばあさん、五男、六男、姉ですね、次男と三男は直接軍に加わって、どこでどうして亡くなったか全然わかりません。

郷里へ帰って、ちょっとへんに思ったのは、どこもかしこも白くなっていますね、それで何だかそういうところを見ると、目が狂ったように近く見えたことが、今も忘れません。

城間賀栄（三十六歳）　本土復員

僕が復員して来てですね、最初に那覇の桟橋に下りた時に、黒人が銃を持って、何名か立っていたんです。それは本土では黒人は見たことがなかったから、沖縄に帰って初めて見たので、びっくりしてですね、そして恐い感じだったんです。

山は真白く、木もなければ草もないんです。それでどこへ行くかと訊いたら、インヌミ屋取りに収容するという。インヌミ屋取りというところは聞いたこともなかったんですね。そうしてトラックに荷物を載せているので、これはどこを通って行くかと訊いたら、与那原を通って行くというんですよ。そこで中山さんたちは船に乗って、西海岸を通ってインヌミ屋取りに行かれた。僕は、与那原通るなら、西原も通るだろうから、荷物の上に乗って、ここを通ろうと思って、荷物の上に乗ってですね、与那原からここを通って来たら、製糖工場の趾形もないんですよ。それで我謝だけは、テントが

いっぱいしているからですね、何んで我謝だけは人はこんなに沢山おるかなと思ったですよ。

インヌミ屋取りに二日くらいいて、西原へ来て見ると、テントが沢山立っていたから、西原の人口は、少くなったような気はしなかったけれど、二、三日経ったら、西原村全体がそこに集結していると聞いて吃驚したですよ。その時僕が一番不思議に思ったのは、真先きに飛んで来るべき妻が、顔が見えなかった。それで家内の姉さんの夫に訊いたら、貴方が来るのを喜んで、家でお茶を沸かしているんだ、と言葉をにごしていたんです。それで、まさかそうではないと、死んだということも聞いたことがなかったから、僕が復員して来たとなれば、真先に妻が飛んで来るべきものを来ないから、どうも不思議だなと、こう思っておったんですが、帰ったら案の定、妻はおらん。次男と三男、それに女の子がおったんです。

そうするうちに長男も本土から帰って来て、親子五名になったわけですよ。五名くらしている時に、我謝は西原村の受け入れ地区で、あちらからもこちらからも受け入れが大勢おったわけです。そして僕は、十月二十日に西原村に帰って、十二月十日ごろに区長命じられたわけですよ。

それで最初のほどは、区長も断って、僕は家内もおらんしできないからと拒んだんですが、部落民は、君でなければどうにもできないから是非やってくれといって、そうしてそれから区長やっていたけれども、一回、二回は退いたこともあるんだが、僕一人しか適任者はいないのか、といって退めたこともあるんだが、結局は十三年何か月、ずっと区長やったんですよ。

それでその当時は、受け入れ体制があるもんだから、余所の部落から来るものもあるし、嫁さんが我謝の者であるが故に、那覇あたりの人も、ここにお世話になりたいといって来る方もあったんです。そういう方がたも全部受け入れをすまして、そうして部落行事の大きな綱曳きがありますがね、翌年六月の綱曳き行事からは盛大に自分の部落内で大きい行事をやって、それから毎年その行事は行われています。

長男は小学校の高等科を卒えるとすぐに、軍需工場、川崎重工業というところへ行きましたが、終戦になって大阪へ行っていました。そうして、終戦後は、わたくしも長崎から大阪へ行きまして、大阪で長男といっしょになって、帰る場合は、僕は一足先に帰ったわけです。

前にさかのぼりますが、わたくしの召集は昭和十九年の九月で、僕はすでに三十七歳ですから、三十七歳で召集されたからには、もう壕掘りして死ぬよりは、大砲の弾を一発でも撃ってから死んだ方がいいと思って、館山の砲術学校に志願してですね、千葉県の館山砲術学校です。そこで三か月半の訓練を受けてですね、特技章という桜に豆だったんですが、海軍のその徽章を貰って、そうして帰って来たら、針尾島の砲台勤務を命じられたんですね（大村湾の入口、佐世保の入口、狭い海峡を前にしている島）。

大砲は十五センチ砲ですが、高角砲でした。陣地構築の場合は、朝鮮の人ですね、彼らを使役して陣地構築はやって、さあ、機械を取りつけるという時は、朝鮮人は全部追い出して、兵隊だけで、その大砲を打ち出すまで取りつけるんです。

また話が後に戻りますが、十・十空襲の時ですね、わたしはあの時は、召集後まだ一か月で千葉の砲術学校にいたんです。この砲術学校は、呉鎮守府管区、横須賀管区、佐世保管区、舞鶴管区と、日本全海軍管区から三百名が集まっているわけです。それで、この三百名の分隊中に、わたし一人だけしか、沖縄県人はいなかったんです。それでその時の教班長の下士官が僕のところへ来て、「城間、沖縄の那覇市は、空襲で全市がやられたが、お前は那覇ではないか」といいましたので、「いいえ、わたくしのところは那覇とはかなり離れています」と答えたら「それでは、家の方は安全だな」といいました。

わたしは自分の所属部隊の第一海兵隊に帰って来て、針尾島に派遣されたんですよ。当時針尾島では、同じ兵隊ではあるが、僕は同じ召集兵ではあっても、特技章を持っていただけにですね、砲台では割り方楽な仕事に廻されていたわけです。

家に帰ってのことになりますが、家内の姉の夫が、同じ家にいて、子供たちを面倒見てくれていたわけです。

戦争の時は、ずっと次男坊が、全部いっしょだったらしいが、お母さんは乳呑み子を抱いてですね、また定子という女の子がいますが、これが自分の弟を負んぶしていたそうです。乳呑み子は全然何でもないがお母さんは弾に当って、やられたんですね。それから定子の方は何でもないが、負んぶしていた男の子はやられたんだそうです。ここで二人がいっしょにやられたんですね。

ここから戦争に追われて南部へ下ったのは、子供七人の中、長男は、軍需工場に徴用で行っていますから、子供六人とわたしの妻と七人ですね。それで、妻と男の子が、いっしょに敵弾にやられましたので、十六歳の次男は、自分で、母と弟を葬ったんですね。

それから捕虜になって、知念村の志喜屋にいたそうですが、十六になる次男は、弟妹の面倒を父母に代って見ていたが、とうとう四男と次女、小さい方の二人は栄養失調で亡くなったんですね。これもわずか十六歳の次男は、自分の手でこの二人を埋葬して、ちやんと、場所もしっかりわかるようにしてあったようです。

それでわたしと長男が、帰りました時は、このもう数え年で十八歳になっている次男が、母や弟妹の遺骨をちやんと、自分たちのお墓へ立派に迎えて、ちやんとしてありましたし、下の弟妹を、まるで父母を兼ねたように守ってくらしていましたので、わたしと長男は、何もしなくてすみました。

それから区長のことにまたかえりますが、わたくしたちは父子五人で、こんなにしてくらしていて、わたくしは区長をしていましたが、妻もいないのだから、知っている村の人には、お茶も沸かして上げないで、水ですましていました。しかし、我謝の部落は、他村からの受け入れも多く、水だけではいけない、具合悪いこともあったわけです。

それでわたしもまだ三十九歳でありましたし、区長の勤めをしている上でも、どうも巧くないところがありまして、家族会議を起しました。父が、妻を娶る方がいいか、娶らない方がいいかという議題ですが、それを三度やった結果、子供たちの意見は、この戦争では妻を失った人、夫を失った女の人も大勢いる。だから父はお母さんを娶るべきだという最終決定になりました。

そうすると今度はまた家族会議を開きまして、それでは、子供のできる人を娶るべきか、できない人を娶るべきかということになりました。子供たちは、異口同音に、子供のできる人を娶って下さい、ということに決った。

それでわたしは最後の提案を出しました。それでは、美人の人、人並みよりは綺麗な人を娶る方がいいか、綺麗でないお母さんにした方がいいかと吟味しました。そうすると、これも皆が揃って、同じ貰うくらいなら綺麗なお母さんにしてくれ、というのです。醜いお母さんをお父さんが娶ったのでは、わたくしたちは他の人に嘲笑われるからというんです。

それでわたしは、子供等の意志通り、後添いの人を娶りました。後添いの人ができましたが、わたしたちの家には、いざこざは全然ありませんでしたが、わたくしは、この家（座談会をしている家）を作るに当りまして、長男の家もいっしょに作ることにしました。わたくしは、新しい妻とここに住むことにして、長男の家を自分の屋敷に作ることにしました。そうしてわたしは言いました。

「祖先の位牌は、父が持って、それからお前に譲るべきだが、しかし父は先に死ぬ、父のところに置いてその後にお前のところへお伴するよりもいっそのことお前が、自分たちの屋敷に崇める、同じことだ、そうしてくれ」といったら、長男はじめ、みんながそれでいいではないかということになって、ずっと長男が祖先を崇めています。

わたしの新しい妻は、三女を生みました。一人は知念高校を出て働いていますが、二番目はやはり知念高校の二年です。三女は、今中学の一年ですかね。この女は美人薄命といいますか病気で、四十四歳で世を去りました。わたくしはそれ以来ずっと独身生活をしています。

二番目の妻が死んで四十九日の七七忌はここですましましたが、位牌はやはり長男の祖先の位牌といっしょにしてありまして、お盆を初め、彼岸やお清明、すべての祭祀は長男によって行なっています。

そうですね、最後に最も大事なことは、何人でも戦争を好むものはいないと思いますが、わたしは絶対に戦争はあっていけないということです。誰でも戦争を好む人はいないでしょう。人間の幸の第一歩は家族がみんな揃って生命を全うし、平和な人生を送ることではないでしょうか。戦争さえなければ、わたしの妻子は死なずにみんな生きていられたとわたしは思っています。これが戦争でめちゃめちゃにされます。戦争は絶対あってはいけないとわたしは自分の人生行路から、強く感じています。戦争を好む人間もいないでしょうけれど。

桃原（西原村）　宮城聰

時　一九六九年十一月十六日
場所　桃原公民館

出席者

氏名	現住所
安谷屋広英	[redacted]
喜屋武久英	
喜屋武久太郎	
与那城ツル	
喜屋武美則	

解説

午前中から曇天で、小雨が降ったりしている天気であったが、われわれが座談会をはじめた午後二時十分からは、雨の本降りとなった。

桃原部落は運玉森の北に位置し、安室部落とは道が境界になっていて、知らない人には一つの部落のように見える。それで、この座談会は、安室の部落の人びとも大体同じ径路で避難したものと考えても差支えないと思う。

喜屋武久太郎区長さんは、終戦当時三十五歳であったが、支那事変に出征されてずっと中国との戦争に最後まで終始して、昭和二十年の十二月に復員されて、二十一年の正月に戦禍に白一色となった郷里へ帰ることができた。復員の方がたには、他の部落で記録してあるので、残念ではあったが、割愛して頂いて、桃原部落のことについて話して頂いた。喜屋武区長さんによる桃原部落民の犠牲は、わたくしたちを驚かした。戸数や人口が少いので、一家全滅や、犠牲になった人びとを指を折って数えることも簡単でかねて調査してあったようであった。

戦前の戸数	七六戸
一家全滅	四一戸
戦前人口	約四〇〇名余
戦後人口	九〇余名

沖縄戦による一家全滅と犠牲になった人びとは、戦争直前の戸数ならびに人口と比較すると、その比率は一家全滅が五四％弱で、全県を通じて最高ではないかと思われる。犠牲者の比率は、七七％強だが、これは、南部の米須よりいい方で、米須はもっとひどい。この数字は、小学生は計算に入っていないそうである。

座談会という本篇の審議決定によって、談者の言葉をそのまま筆写することに努めているので、したがって、言葉が半分、あるいは三分の一くらいでもって、飛ばして前をいそぐのが多い。その点で喜屋武美則さんの談話もその特質が相当に強く出ている。読者が推察しなければならない話し方が多いが、わたくしが推察して文章を作ると、却って戦火の中を逃げ廻っている当時の人間感情、周囲の情景など毀わす惧れがあるので、これを忠実に筆写するのは難渋な作業であるが、可能の限り本人の話した言葉のままにすることにし